
魔法少女リリカルなのはVivid 蒼の重騎士の日常

アガイル・グレイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはVivid 蒼の重騎士の日常

【Nコード】

N1395W

【作者名】

アガギル・グレイン

【あらすじ】

あの『JS事件』から四年……青の重騎士ことサリエル・フォーゼオンは傷ついた体を休めながら、のんびりと過ごしていた。しかし、ある少女との出会いがサリエルの運命を加速させていく……

この作品は作者の拙作、「魔法少女リリカルなのはStriker s 蒼の重騎士の再誕」の続編として書いています。もし読まれるのであれば、是非そちらから読む方をオススメします。また、こういう二次創作が嫌いな方はご遠慮ください。

人物紹介（原作キャラ含む）（前書き）

ここではオリキャラの紹介をしています。

話が進めば改変していきますので時々チェックしてくださいね。

人物紹介（原作キャラ含む）

サリエル・フォーゼオン（本名：ラグナ・イシュバロン）

年齢 21歳

身長 177cm

体重 81？

性別 男

性格 基本的に真面目だが、飄々としていてつかみ所がない。愛妻家。

所属 機動六課↓戦技教導隊

階級 二等空士↓空曹

魔力ランク A-

魔導士スキル 総合B-↓総合A A-

魔法術式 近代ベル力式

魔力色 ちよつと暗い青

所持資格 バイク免許、教官資格、教導官資格、小隊指揮官。

趣味 園芸、読書、ツーリング

特技 一度覚えたことは絶対に忘れない事

好きな物 綺麗な花、バイク、仲間、ココア、フェイト、フェイトの手料理。

苦手な物 黒豆、蜂蜜、退屈、コーヒー、紅茶。

外見 マクロスFの早乙女アルトを髪を青に、目の色も青にした感じ。

概要

本作の主人公。Strikersから四年経ち、夢だった戦技教導官になった。

また青の重騎士の再誕終盤から付き合いだしたフェイトとは見事ゴールイン。今では新婚ホヤホヤの熱々夫婦である。

基本的な性格は変わっておらず、時々フェイトやヴィヴィオをいじっては面白がっている。

有事に備えて今も鍛錬を怠らない。そのため、非常に引き締まった体を維持している。

そのためか、管理局でも有数の実力者として広く知られている一方、四年経った今でも元六課隊長陣には勝てない。

なぜか教導の仕事がひっきりなしに入ってくる。教導期間は短くて三日、長くて一ヶ月。これは自分の教えが半日や一日で伝わると思っていないため。

教導方針は「体力は技術の土台」。そのため、教導初日は大体一日中ランニングである。後は実戦重視の模擬戦を行う。

時々はやてやフェイトから調査または潜入任務の仕事を頼まれるこ

とがある。サリエルはこれを休養代わりに受けている。

使用するデバイスは入局当初からの相棒、そして今は教導用に調整したアームドデバイス「グラディアス・トライ」と六課解散時にマリーナから新たにもらったインテリジェントデバイス「ヘルメス」。

【デバイス】

名前 グラディアス・ツヴァイ↓グラディアス・トライ

規格 人格型アームドデバイス

人格 女性型

形状 待機状態は懐に入れるほどのカード型。起動状態はやや反りの入った小太刀となっている。カートリッジはオートマチック式の片方5発、合わせて10発。

アグレッサーフォーム

教導用に新たに作られたフォーム。小太刀に白基調の軽鎧、黒のグローブを装着し、濃紺の陣羽織を着る。

なのはのアグレッサーモード同様、軽量で機動性に優れ、魔力消費も押さえることで長時間の行動を可能にしている。また防御力も目に分かるダメージを見せるためにあえて落としている。

この状態でもヘルメスを展開して、銃を取り出すことは可能。右手に剣、左手に銃といったスタイルも取ることもできる。

アサルトフォーム

前作同様双剣に青のフルプレートと黒のグローブ、銀のインナーと

白銀のマントのバリアジャケットを装着する。
主に犯罪者を取り押さえる時にこのフォームを選択する。

ブレイブフォーム

サリエルの中でもっとも強力なフォーム。アサルトフォームにバイザー型のヘルメットと刃の付いたガントレットを追加で装着する。昔はかなり制限が付いていたが、サリエルの技術が伴ってきた今は全ての技がこのフォームから繰り出せるようになった。現在封印中で、滅多なことではこの封印は解けない。

備考

航空武装隊に所属していた頃からのデバイス。天才デバイスマイスター、マリーナ・イシュバロンが初めて作ったデバイスであり、最高傑作である。

近接格闘に特化したデバイスであり、頑丈さはピカイチ。また擬似感情が試験的に導入されているため、インテリジェント型並に感情が豊かであり、秘書代わりにもなる優れもの。

サリエルとは7年もの付き合いであり、サリエルは「これ以外のアームドデバイスは考えられない」と言い、グラディウスも「サリエル様以外のマスターは考えられない」と言っているほどで、両者の絆は想像を遙かに超えるほど深いものである。

名前 ヘルメス

規格 インテリジェント型

人格 男性型。

形状 待機状態は羽の紋章が入ったペンダント。起動状態はプラチナのリボルバーが二丁展開される（イメージはS & amp; W M 29）カートリッジは六連装回転シリンダー式で口径が小さいものを搭載しているが、使用する魔法がまだ存在しないため既存の魔法の威力を上げるときぐらいにしか使われない。

ガンナーフォーム

名前の通り射撃に特化したフォームである。リボルバーを両手に持ち、モニター構造のゴーグルに黒の軍服と音が出ないブーツを装着する。軍服はフェイトのインパルスフォームを参考にしてデザインされている（もちろんズボンである）

主にショートレンジからミドルレンジの撃ち合い、多対一との戦闘、潜入任務などに使用される。また教導でも射撃魔法を教えるときに使われている。

無論ワンハンドモードも搭載されている。

またアサルトフォーム、アグレッシブフォーム、ブレイブフォームの時にはフォトン・ステップを制御するためにブーツの形態をとる。

備考

青の重騎士終盤で失った「マグニフィ・ダンサー」の代わりとして作られたデバイス。マグニフィ・ダンサーの基礎データを流用している。

サリエルが教導官になることを決意したため、マリーナはノーヴェがつけていたガンナツクルの射出機構を研究、改良して作り上げられた魔力弾核形成補助装置を搭載。これにより魔力弾核形成不良のハンデはほぼ無くなった。

インテリジェント型にしたため、きめ細かい制御が可能になった。先輩デバイスのグラディアスを姉様と呼ぶ。

原作キャラの説明

高町なのは

原作同様、ヴィヴィオといっしょに住んで、教導官をしている。
家が隣通しなので、フェイトはもとよりサリエルとも親しい関係である。

フェイト・テストロツサ・ハラウン

Vividが始まる一年前にサリエルと結婚。フェイト・テストロツサ・イシュバロンとしてサリエルの妻になった。

売れっ子の執務官であるため、なかなか時間が取れないながらもサリエルとは今も熱々な関係である。

ヴィヴィオ

原作同様にストライクアーツに頑張るスポーツ少女。今作では準主人公扱い。

サリエルの事を兄として、格闘術の先生として慕っている。

ナンバーズ

ウーノ

海上隔離施設を出た後、正式にイシュバロンの養子になった。今はマリーナの元でデバイスマイスターとして補佐している。

本来ならのんびりとスカリエッティに付き従う以外の生きる意味を見つけていこうと思っていたところに、マリーナが強引にマイスター見習いとして引っ張っていった。

サリエルとの関係はグラディアスとヘルメスの専属整備士であり、パートナーとして良好である。

トーレ

ウーノ同様、イシュバロンの養子になり、今年グライドに恩を返すため、管理局に入った。

本人の考えでは警備隊に入って、人の役に立ちたいと考えていたのだが、ウーノと同じくサリエルにセツテといっしょに教導官補佐として引ッ張ッて行かれた。

サリエルとの関係は部下として、ドミニランスを倒した男として一定の信頼を置いている。

チンク

原作同様、ナカジマ家の娘となった。

サリエルとの関係は相談相手。よく妹の愚痴とか仕事の愚痴を話しているようだ。

セツテ

トーレと同じくイシュバロンの養子になり、今年から管理局に入っ

た。

理由としてトーレと同じ場所で自分の価値を見つけていこうと考え

ていたところ、サリエルにヘッドハンティングされてしまった。

サリエルとの関係は無口ながらも一定の信頼を置いている。

ノーヴェ

原作同様、ナカジマ家の娘となった。

ヴィヴィオの師匠でもある。

サリエルとの関係は遊び友達とアドバイザー。ヴィヴィオの成長に合わせて訓練メニューなどの相談をよくしている。

ディエチ

原作同様、ナカジマ家の娘となった。

前作でサリエルに救ってもらったせい、友達以上の感情を抱いて

いる。

サリエルとの関係は遊び友達と買い物相手。センスが良かったため、よくサリエルの服を選んでいる。

ウエンディ

原作同様、ナカジマ家の娘となった。

ナンバーズのムードメーカーとして、どんなときでも明るい雰囲気を作ってくれる。

サリエルとは遊び仲間で騒ぎ仲間。サリエルのテンションがハイの時にウエンディと騒ぐと、大変な事になる。

第一教導 四年後……いきなりびっくり展開！？（前書き）

作者「新作スタートだああああっ！！ ひゃっほー！！！！ 初めての人も青の重騎士の再誕から読んでいる人もこんにちはー！！」

サリエル「うるせえ……前作から引き続き主人公を務めるサリエル・フォーゼオンだ。」

作者「いやゝ、新作ですよ、新作ゝ まさか自分が続編なる物を書けるなんて思っていましたか、サリエル君？」

サリエル「これっぽっちも思っていなかった。むしろ前作でいつ更新されなくなるかが心配でしょうがなかった。」

作者「……俺も一時期そう思っていたときがあったよ。ですが……現実とは違った！！ こうして続編まで書き上げているのだから！！」

サリエル「はあ……このバカに付き合っているとこっちまで疲れる。それでは、どうぞ閲覧してください。できるなら前作「魔法少女リリカルなのはStrikers 蒼の重騎士の再誕」を読んでから見てくださいな。」

作者「感想、意見、質問はいつでも待ってます。」

第一教導 四年後……いきなりびつくり展開！？

次元の海を中心世界『ミッドチルダ』

都市型テロ『J S 事件』の発生と解決からは……

すでに4年が経過して……

対処に当たった『機動六課』も既に解散……

そして、蒼の重騎士として復活を遂げ、最強の敵・ドミニランスに打ち勝ったサリエルは……

現在は有事に備えて爪を研ぎながらも、その傷ついた体と翼を休めていた。

これは次世代にその経験を伝え、育んでいく現役戦技教導官サリエル・フォーゼオンの鮮烈な物語。^{ヴィヴィッド}

ヴィヴィオ「……私が主人公じゃないの？」

……あくまで主人公はサリエルですから。

ヴィヴィオさんは準主人公って位置になっちゃいますね。

ヴィヴィオ「うゝ……なんか、納得いかないんだけど？」

納得してください。それでは……スタートです！！

魔法少女リリカルなのはVivid 蒼の重騎士の日常

第一教導 四年後……いきなりびつくり展開！？

朝日が眩しくし目を覚ます。

ボリボリと頭を掻きながら起き上がり、いつもの日課である体の総

点検をする。

……うん。疲れは残っていない。昨日は一日オフだったから、全部抜けたな。

カーテンを開けて、まだ昇ったばかりの太陽に目を細める。

「う……ん……」

同じベットで寝ていた妻もその光が眩しいのか、布団を被って背を向ける。

そんな妻を愛おしく思いながら頭を撫でて、手早くランニング用のジャージに着替える。

音を立てないように外に出て、ストレッチをしていると……

「お兄ちゃん、お待たせ!!」

「よし、じゃあ行くか」

「うん!!」

妹分の高町ヴィヴィオがジャージ姿でやってきた。昔の危うい所はもう見受けられず、すっかり成長したと感ぜられる。

毎朝ヴィヴィオとランニングするのが日課だ。しかし、ヴィヴィオが普通に走るのに対して俺は……

「ヘルメス、今日は10キロで行こう」

『All right.』

両手両足に10キロのおもりをつけて走る。始めた頃は重くて仕方がなかったが、今では普通に走っているのと変わらない。

しばしランニングコースを二人で無言で走る。いつものことだ。

ヴィヴィオは昔なのはさんと約束した事を果たすために……俺もライバルのドミニランスと誓ったことを成すために強くなる。

それが分かっているから、こういうトレーニングではしばし無言だ。二人とも分かっているのも苦ではない。

そして、いつもの市民公園内にある魔法練習所にたどり着いた。

「ふう……気持ちいい!!」

「大分息が切れなくなってきたな。感心感心」

「そりゃ、毎日ちゃんと走っていますから」

「だな。それじゃ、体ほぐしてから組み手な」

「はい」

適当にストレッチをしたら、いつものように組み手を始める。

ヴィヴィオはしなりを利かせたパンチをサリエルにかますが、サリエルはそれを苦ともせず打ち払う。

ストライクアーツをやっているので、それなりに体捌きもいい。

確か……スバルに基礎を教えてもらって、普段はノーヴェを師にして友達と頑張っていると聞いているけど……

だったら、この年でこの打ち込みは納得だ。

こうして時々見ているが……その実力はみるみる伸びていくのが分かる。

30分ぐらい組み手を続けて、サリエルがヴィヴィオの攻撃にカウンターを入れて終了する。

「ありがとうございました!!」

「ああ。しかし、ヴィヴィオ……お前も大分良くなってきたな」

「ホント!?!」

「俺が言うんだから間違いないよ。体の動きもいいし、その年でそれだけできたら十分だ」

「やったー!!」

「さあ、帰るぞ。今日は始業式だろ? ヴィヴィオももう四年生か

あ……」

初めて会った時が五歳の時だったから、あれから四年。
もうすっかり大きくなっちまって……
泣き虫で甘えん坊だった子供が今ではすっかり強くなった。

「うん。始業式だけだから、早く帰れるよ」

「俺も今日は早めに上がるから、夜になったらみんなでお祝いしような」

「はい!!」

来た道をクールダウンがてら走って戻り、ヴィヴィオを家に送ってから自宅に帰る。

すでに家の中はカーテンが開け放たれて、燦々と太陽の光を取りこんでいる。

リビングの方ではいいにおいがしている。あと少しすれば、朝飯にありつけるだろう。

ランニング用のジャージを脱いで、シャワールームに飛び込む。

汗を落としている間に、ヘルメスに今日の予定を聞いておく。

「ヘルメス、今日の予定は？」

『今日は教導最終日です。一日をかけて模擬戦をし、仕上がりを確認してもらいます』

「何時ぐらいに終わる？」

『早くて4時ぐらいでしょうか？　ですが、事後報告や書類がありますので……』

「それはトーレ達に任せよう。今日はヴィヴィオの進学祝いがあるからな」

『……代わってもらえるでしょうか？』

「それも仕事だと言って、無理やり代わってもらっ」

『……さいですか』

適当に汗を落としたところでいつの間にか用意されていた航空隊の制服に袖を通して、リビングに向かう。

テーブルの上にはすでに朝ご飯が並べられていて、キッチンには……

「おはよう、サリエル」

「おはよう、フェイト」

「朝ご飯、ちょうどできたから食べようよ」

「もちろん」

サリエル・フォーゼオンの妻、フェイト・テストロッサ・イシュバロンが制服の上にしたエプロンを外して席に着く。サリエルもそれに倣って席に着いた。

二人は一年前に結婚して、この新居で幸せな新婚生活を築いている。フェイトは執務官、サリエルは戦技教導官でなかなか二人の時間はとれないながらも、二人で入れる時間をできるだけ多くしようと努力している。この朝食もその一環だ。

手を合わせて、フェイトが作った朝食をパクパクと食べていく。

「今日は早く帰ってこれるの？」

「ああ。事後報告とかはトーレ達にやらせて、早めに上がってくる予定だ。フェイトはどうなんだ？」

「私も大丈夫かな？ マリーさんのところに例の物を取りに行つて、そのあとちよつと書類を整理する位だから……」

「おつ、できたのか？ ヴィヴィオ専用のデバイス？」

「昨日マリーから連絡が来たの。何とか間に合つて良かったね」
「だな。ヴィヴィオ驚くだらうな」

二人は笑顔で雑談をかわしながら、朝食を終わらせる。
ありふれた幸せであるが、二人にとって極上の幸せ……

ここ四年、サリエルはその幸せをありがたく享受している。

俺……今死んでも未練はないわ。あつ、せめて子供の顔を見れたら

……

「どうしたの、サリエル？」

「うんにゃ、何でもねえ。それじゃ、行ってくる」

「いつてらっしゃい、あなた」

ガレージに止めてあるヘリオンを玄関まで移動させ、行ってきましたのキスをして教導している隊の隊舎に走らせる。

今はこうして新婚はややだがあのやりとりがいつまで続くか……まあ、ゆっくりと慣れていけばいいさ。口では言わないけど通じ合っている……そんなおしどり夫婦になっていればいいのだから。

サリエルはちよつとだけ口元を綻ばせて、教導に向かうのであった。

ヴィヴィオside

私、高町ヴィヴィオはミッドチルダ在住の魔法学院初等科4年生。

「公務員」のママと二人暮らしで……自分で言うのもんだけど、結構仲良し親子です。

お隣はもう一人のママ、フェイトママとサリエルお兄ちゃん。二人はなのはママと私のことを考えてくれて、ここに新しい家を構えたみたいです。

「ヴィヴィオ、今日は始業式だけでしょ？」

「そだよー」

「今日はママもちよつと早めに帰ってこられるから、晩ご飯は4年生進級のお祝いモードにしようか？」

「いいねー」

「さて、それじゃ……」

「行つてきまゝす」

パチンと手を合わせて、自分が通っているSt・ヒルデ魔法学院に向かう。

着いたら、早速掲示されていたクラス分けの発表を見て、ガッツポーズ。

「ごきげんよう、ヴィヴィオ」

「おはよ」

「コロナ、リオ」

「クラス分け、もう見た？」

「見た見た!!」

「三人一緒のクラス」

「「イエーイ!!」」

仲良しの友達と……

「選択授業で応用魔導学を選択した皆さんは、これから授業も難しくなってくると思いますがしっかり学んでおけば将来きっと役に立ちますからね。」

結構ハイレベルだけど楽しい授業……

「は、終わった終わった!!」

「寄り道していく？」

「もちろん」

「また図書館寄っていきよ!! 借りたい本があるし」

「あつ、でもその前に教室で記念写真撮りたいな。お世話になって

いる皆さんに送りたいんだ……皆さんのおかげで、ヴィヴィオは今日も元気ですよ……って」

リオとコロナと私が寄り合った写真をみんなに送り、その後図書館に入り浸る。

続々と先ほどの返信が自分の通信端末に返ってくる。やっぱり嬉しいな……メールが返ってくるって……

「そういえばヴィヴィオって、自分専用のデバイス持っていないんだよね？」

「それ、フツの通信端末でしょ？」

「そーなんだよ……うち、ママとその愛機レイジングハートが結構厳しくて……それにお兄ちゃんも欲しいって言うとおんまりいい顔はしないし……」

実際なのはママに「基礎を勉強し終えるまでは自分専用のデバイスとかいりません」って言われて、レイジングハートを代役させているし……

お兄ちゃんも「早い時期にデバイスを手に入れるとどうしてもそれを頼りにしてしまうからな。まずは自分の体をまともに動かせるようになってから……それができてやっとデバイスが扱えるようになるんだ」って結構厳しいこと言われたし……

やっぱり教導官の二人から見たら、まだまだ私って基礎ができていないのかな？

「リオはいく……自分用のインテリ型で」

「あはは……」

『I'm sorry』

愚痴っていると、また通信端末がメールを受信した。

送信者は……ママ？

「何かご用事でも？」

「あつ、へいきへいき……早めに帰ってくるとちょっと嬉しいことがあるかもよ……だって」

「そっか」

「じゃ、借りる本決めちゃおー！」

「うんー！」

本を借りて、図書館の前でリオ達とお別れ。

いい事が待っているとどうしても小走りになっちゃうな。

……実は私はその昔、生まれ方関係でちょっといろいろあったりした。

なのはママとも血の繋がった親子でもないし……

今は仲良しのみんなとも、ほんの数年前には本当に……本当にいろいろな事があった。

助けてくれたいろいろな人たち……

わたしがわたしのまま、高町ヴィヴィオとして生きることが許してくれた人たちのおかげで……

わたしは今、なんだがすごく幸せだったりします。

ヴィヴィオside out

時間を遡り、午前中。

サリエルは教導している隊の最終チェックをしていた。

自らをアグレッサーとして、廃墟で構成された訓練フィールドを駆け巡る。

正面と左から誘導制御弾……一般的なアクセル・シューターが飛んでくる。

それらを避けられるものは避け、直撃しそうなものだけグラディウスで切り払う。

「ふむ……誘導の仕方は合格。後はミドルレンジでの撃ち合いだな」
「わたしの出番ですか？」

「ああ。ヘルメス、ガンナーフォームだ」
「All right」

白基調の軽鎧の上から羽織った陣羽織から一転して、アサシンと思わせる黒の軍服と音を吸収するブーツ姿のバリアジャケットに切り替わった。

手には二丁拳銃。サリエルは教導官になってから、射撃を教えるときはこの姿を一貫して取っている。

二年半前に教導官刺客を習得して以来ずっと訓練を積んでいるため、今では一般の局員では対抗できないほど銃捌きが上達している。地面スレスレを飛んで、四人一組で固まっているチームに接近する。それで自らの距離に置き、ヘルメスの引き金を引く。

『Variable Barrett』

二丁の拳銃から引き金を引くたび、青の魔力弾が撃ち出されていく。四人は一斉に散開し、俺を取り囲もうとするがそうはうまくいかない。

もともとこのガンナーフォームは多対一を重要視して作り上げたフォームだ。

ミドルレンジからのバラ撒きはもちろん、二丁拳銃での左右の撃ち分け、多種多様の弾丸セレクト、アサルトフォームを比べても柔軟性があることは間違いない。

サリエルは瞬間的に二対一の状況に持ち込むように仕掛ける。しかし、そうは簡単にさせてはくれない。

ここ一週間みっちりという状況にさせるなという事を叩きこんでいたので、さすがに動きはいいか……

「教官！！ もらいました！！」

「それで決まるほど、現実には甘くない」

『Change Barrer・Shot Cluster』

すぐさま弾丸を変え、銃口を接近戦を挑んできた一人に向け、近接向けの拡散弾を撃ち込む。

一瞬で広範囲にばらまかれたため、攻撃を中断せざるを得ず、プロテクションで拡散弾を防ぐ。

さらにサリエルは……プロテクションの上から何発も撃ち込む。

「さて……どれほどで抜けるかな？」

『Change Barrer・Piercing shot』

一発一発丹念に撃ち込んでいき、相手のプロテクションは見る見るうちにヒビが広がる。

そして、五発目を撃ち込んだ時にプロテクションが砕け散り、隊員はのけぞってしまう。サリエル相手にそれは命取りだった。

とどめを刺そうと、銃口をそいつに狙い定めるが他の隊員がそれをさせまいと援護射撃を繰り返す。

しかし、それをものともせず、左手の銃で全て撃ち落とし、狙いを定めた隊員にとどめを刺した。

それと同時に模擬戦終了を知らせるアラームがフィールド全体に響き渡る。

「よし、模擬戦終了。一旦集合しよう」

このチームの他にも、二カ所で模擬戦を行っていたチームも集めて、

評価を下す。

他のチームのアグレッサーを勤めていた……トーレとセツテも俺の後ろで腕を組んで並んでいた。

「え」と……全体的にフォーメーションは良くなった。だけど、まだまだ一対一に持ち込まれすぎる。そのことだけ注意するように」

「……はいっ！」「……」

「トーレ、お前の所はどうだった？」

「どうも何も、接近戦がお粗末すぎる。わたしがちよつと仕掛けた程度でもうアタフタしているぐらいだから……それ以外は及第点だな」

「セツテの所は？」

「私の所はそつなくできていました。ただ言わせてもらうと誘導の仕方や攻撃が素直すぎると……」

「そこら辺は経験で補っていくしかないだろう。まあ、何はともあれ、一週間俺の訓練によくついてきてくれた。本当にありがとう」

それを聞いた瞬間、隊員達の顔にようやく安堵が浮かんだみたいで、全員大きなため息をついていた。

解散を命じて、別の場所で待機している残りの隊員に通信をつなげる。

「残りは午後から！！　昼食食ったらすぐに始めるからな。それじゃ、休憩！！」

サリエル達も昼食をとるためにフィールドの外に出る。

展開したフィールドを修復するためにコンソールを展開し、慣れた手つきで叩いていく。

トーレとセツテはこの作業が終わるのを待っているようだ。

「……どうだ？ 補佐官になって、初めての教導は？」

「私はノーヴェやウエンディ達を教えていたからそれほど苦ではないが……」

「私は少々疲れました……人に教えて、アグレッサーまでやって……これで疲れないって言うのがおかしいです」

「俺もそうだったよ。最初なのはさんの教導について行った時も、かなり疲れた」

セツテの様子を見ると、言葉通りどこかぐったりした様子を見せている。

うーん、これは午後の教導はちょっと厳しいかな？

トーレは全然疲れた様子は見せていないけど……さすがに午後は軽めにさせるか。

そんなことを考えて、コンソールを叩いているとグラディアスからメールを受信したという報告を受ける。

叩きながら、メールを開いてみると……

「……お嬢、いい笑顔していますね」

「確か、4年生になったんですね？」

「ああ。さて、調整も完了したし、メシ……食いに行こうか」

コンソールを閉じて、二人と食堂に行く。

これがサリエルの教導風景。

教導期間は短くて三日、長くて一ヶ月のスパンで教導を受け持っている。半日や一日の教導を受けない理由として、自分の教えがそんな短い期間で伝えられないと考えているから。

まだまだ数が少ない近代ベルカ式の使い手であり、腕も確か……そして、あの奇跡の部隊の出身だからだろうか、ひっきりなしに教導依頼が舞い込んでくる。

四月から教導官補佐としてトーレとセツテを迎え入れて、より充実

した教導を行っている。

教導官資格を取り、正式に戦技教導官になってから二年半……ようやく板についてきたと言うところか。

食堂に向かっている途中、何かを思い出したかのように手を叩き、トーレ達の方に向き直る。

「あつ、セツテ……午後からの教導、アグレッサー役はやらなくていいぞ。隊員と一緒にモニターでチェックしてくれ。」

「……分かりました」

「トーレも午後は二チームだけ担当してくれ。それからセツテと同じように頼む」

「私はそれほど疲れていないぞ」

「精神的に疲れてるだろ？ そんなに仕事がしたいのなら……報告書作成と部隊長への完了報告、セツテと一緒に頑張ってくれ」

「……残業か？」

「いや、こういう事にも慣れておかないとダメだろ？ これも教導官の仕事の内だから我慢しろ」

「そういえば……朝に陛下のお祝いしなくちゃな……とか言っていましたよね」

「……」

図星を突かれ、口笛を吹いて誤魔化そうとするが、すでにサリエルの行動を知り尽くしている二人がその程度で騙されるわけがない。しかし、それを咎めたところで意見を変える事はないと分かっているの、盛大にため息をついて諦める。

トーレとセツテ、そしてウーノは海上隔離施設から出た後、正式にグライド大将の養子に入り、イシユバロンの実家に住み込んでいる。その関係で、サリエルはいろいろと三人の世話をしている。トーレとセツテが働きたいと言った時も、こうして教導官補佐として自分の庇護を受けられるよう便宜を図った。

本来なら教導官補佐になるためにある程度キャリアを積まなければいけないのだが、そこは自身のコネをフルに活用して管理局に入った直後にこの二人を補佐にした。

……自分でこういうのもなんだが、未だにトーレ達の事を悪く言う輩はたくさんいる。

確かにあのＪＳ事件の首謀者だ。しかし、今ではこうしてちゃんと更生して、社会に順応している。

それなのに、管理局の古参の人間はトーレ達のことを指さしてこう言う。

「犯罪者」「人ではない」「贖罪のつもりか？」

そんな声がそこら中から聞こえてくる。いくら偉いからって、そんなことを言っている道理は無いはずなのに……

しかし、三人はそういった逆風にめげず、逆にこう言いかけた。

「ならば、そういう声が上がらないほど努力すればいい。お前のようにな」

なんて強い覚悟と思い知った。

だが、むかつくものはむかつくので基本的にそういうことを言った輩には闇討ち一発。フェイクシルエットでやっているから誰が犯人かは分らない。

気づいたときには病院のベッドの上……老害はしばらく長期療養に入ってもらうことにしよう。

まあ、何はともあれ……今、俺はこうして恵まれた環境で働いている。

昔の仲間とも頻繁に連絡を取り合っているし、他のナンバーズ達ともよく会っている。

これが……今の俺の日常。

改めてこんないい環境に身を置けることに感謝しながら、サリエルは昼食に向かうのであった。

午後の教導が終わり、隊員を集めて最後の訓示が終われば……これで教導は終了である。

この後に報告書作成や、教導が終わったことをその隊の部隊長に仕上がり具合の報告、その他諸々の仕事が続いているが今日はそれらを全てトーレ達に任せて（押しつけて）、帰宅する。

お祝いするって言ったしな……早めに帰って、俺もその祝いに加わるか。

外に出てみると、すでに夕日が西の地平線に落ちかかっている。

すでにヘリオンがエンジンをかけて、俺のことを待っていた。

全く……主人思いのバイクなこと……

「さて……我が家に帰るか」

『実家に寄らなくても？』

「別格ヴィヴィオへのプレゼントを受け取りに行くつもりはないし、親父達なら多分郵送するだろう。さっさと行くぞ、ヘリオン」

『畏まりました』

スロットルを思いっきり回して、1070ccのエンジンが股下で唸りを上げる。

家までの道のり……人気の少ない道路を一筋の黒い流星が駆け巡る。サリエルは、このバイクで感じる風が好きだった。空とは違う、この風を切っていく感触。

何も考えず、ただ風を感じるままに運転しているとあっという間に自宅に着いてしまった。

玄関の前で降りて、自宅に入っていく。着替えている間にヘリオン

が勝手に車庫に入ったようだ。

しかしまあ……こう、家があるのに電気がついていないって、何か悲しいな。

仕方がないけど……ほとんど隣のなのはさんの家に入り浸っているからな。

そんなことにため息をつきながら、隣の家へ入っていく。

「ただいまあゝ」

「あつ、お帰りー!! お兄ちゃんー!!」

「お帰りなさい、サリエル君」

「お帰り、サリエル」

ちょうど晩ご飯を食べ始めるところだったのか、三人ともテーブルについて、俺を迎えてくれた。

サリエルのいつもの定位置、フェイトの隣に座って一息つく。その間にフェイトがご飯をよそってくれた。

「それじゃ、ちょうどサリエル君も帰ってきたことだし……ヴィヴィオ、4年生進級おめでとうー!!」

「おめでとうー!!」

「えへへ、ありがとう」なのはママ、フェイトママ、サリエルお兄ちゃん」

満面の笑みを浮かべるヴィヴィオを見て、俺までいい気分になってきた。

こうやって、人を祝うっていうのもいいな。

会話も弾み、テーブルの上にある料理も見見るうちに無くなっていく。

「いじちそうさま」

「ゴチ……ふう」

「はい、お粗末様でした」

食器を運ぶのを手伝って、洗い物は女性陣に任せる。

その間、ヴィヴィオと一緒にテレビを見る。

いつもの定位置、俺の膝の上に座って何やら嬉しそうに揺れている。……4年生になっても、こうやってくっついてくれるのは嬉しいんだけど……やっぱりまだまだ子供だなんて、思ってしまう。

いつかは離れていくのはわかってるし、年頃の女になれば近寄らなくなるかもしれない。

何か……まだ子供はいないけど、子供をもったような父親のようだな。悲しい悲しい……

フェイトとなのはさんも洗い物が終わったらしく、一息ついていた。そろそろ……かな？ ヴィヴィオが動き出すのは。

「さて、今夜も魔法の練習しとこーっと」

「あ、ヴィヴィオ、ちよっと待って」

練習に行こうとするヴィヴィオをなのはさんが呼びとめる。

その後ろではフェイトが何やらごそごそとあるものを取り出そうとしている。

「ヴィヴィオももう4年生だよね？」

「？ そろですか？」

「魔法の基礎もだいぶできてきたし……そろそろ自分の愛機デバイスを持つてもいいんじゃないかなって」

「ホ、ホントツ！？」

「ああ。言っただろ？ 体の動きがいい〓基礎ができてきたってことだ」

「実は今日私がマリーさんから受け取ってきました」

フェイトの持っていた箱を開けると……

「……ウサギのぬいぐるみ？」

「違うよ、サリエル。ちゃんとしたデバイス」

ウサギのぬいぐるみにしか見えないが……

そうサリエルが思っていた時、ぬいぐるみが空に浮いた。

ヴィヴィオも目を丸くして、二人の後ろに隠れて指をさす。

「と、飛んだよ！？ 動いたよ！？」

「そのウサギは外装……っっていうかアクセサリーだね。飛ぶのはおまけ機能だってマリーさんが」

「へえ……あの人、こういうところは凝るんだ」

ぬいぐるみを纏ったデバイスはフヨフヨと二人の後ろに隠れているヴィヴィオに近づく。

ヴィヴィオは小さく声を漏らして、浮いているデバイスに見とれる。

「色々トリサーチもしてヴィヴィオのデータに合わせた最新式ではあるんだけど、中身はまだほとんどまっさらの状態なんだ」

「名前もまだ無いからつけてあげてっ」

「えへへ」実は名前も相性ももう決まっていたりして……そうだ、

ママー！ リサーチしてくれたって事はアレできる！？ アレー！！

「もちろんできるよー！！」

「へえ……アレもできるのか？」

「……？」

フェイトだけ頭にハテナマークを浮かべるが、まだ教えない。

アレもできるように設定しているのか……だったら、これから教え

るときはそれを使ってもらっただけ教えていこう。

ヴィヴィオはぴよんぴよん跳ねながら外に出て、魔力陣を展開する。

「——マスター認証、高町ヴィヴィオ。術式はベルカ主体のミッド混合ハイブリッド。私の愛機^{デバイス}に個体名称を登録。愛称は^{マスコットネーム}『クリス』。正式名称『セイクリッド・ハート』。いくよ、クリス……セイクリッド・ハート！！セーリット・アープ！！」

魔方陣が発光すると同時に、セイクリッド・ハート……クリスの基本設定も行われる。

そしてセツトアップが終わり、光の中から出てきたのは……聖王モード、つまり大人のヴィヴィオだった。

何も知らないフェイトはその姿に目を白黒させて驚いている。事情を知っているなのはさんは無事にセツトアップしたことを褒め、サリエルはフェイトの様子をニヤニヤと見ているだけ。

「なのは、サリエル！？　ヴィヴィオが、ヴィヴィオが……！！」

「落ち着け、フェイト。これは大人モードって言って、あの事件のように聖王化している訳じゃないんだ」

「こっちの方が魔法や武術の練習に向いているから、きちんと変身できるように私とサリエル君が監督していたって訳」

「でも……」

きちんと説明されてもどうやら納得いかないようだ。

確かに大人モードは一時的にとはいえ、聖王の姿をとるのだ。

その姿での暴走を懸念しているのだろう。レリックも取り込んでいない今はそんなことは滅多と起こらないと思うのだが……

んー……とどう説得するかを悩んでいるヴィヴィオはポンと手を叩いて、一旦元の姿に戻った。

「大丈夫だよ、フェイトママ。変身したってヴィヴィオはちゃんと高町ヴィヴィオのまんま。ゆりかごもレリックももう無いんだし、だから大丈夫。クリスもちゃんとサポートしてくれるって。」

「うん……」

「心配してくれてありがとう、フェイトママ。でも、ヴィヴィオは大丈夫です。いざとなったら、サリエルお兄ちゃん達が助けてくれるしね」

「もうそんなに若くないが……全力で助けてやるよ」

「ありがとう、サリエルお兄ちゃん。それにそもそもですね……ママ達だって、今のヴィヴィオぐらいの頃にはかなりやんちゃしていたって聞いているよ？」

「そ、それはその……」

「あはは」

二人はアタフタと誤魔化しているが、実際にそうです。かなり無茶していました。

でもそれが、この二人の出会いであり、物語の始まりなのだ。

初めはどうであれ、今はこうして大親友なのだから万事OKだろう。

「そんなわけでヴィヴィオは早速魔法の練習に行ってきたと思います。」

「あ、私も」

「俺もついて行こうかな。フェイト、エリオ達の連絡は頼んだ」

こうして、ちょっとハプニングがあったが三人はいつもの練習場所、市民公園内の公共魔法練習所に向かう。

一人になったフェイトは別の次元世界で自然保護隊に所属している家族のエリオとキャロに連絡を取る。

「……ってことになってね。本当にびっくりしたんだけど、キャ

口とエリオは聞いてたりしてた？」

「はい。兄さんからバツチりと。」

「お兄ちゃん、フェイトさんを驚かすためにあえて言うなって言うてきましたから」

「もゝ、サリエルの意地悪！！ 何も隠すこと無かったと思うのに……」

「多分フェイトさんの驚く顔が見たかったんじゃないですか？」

「お兄ちゃん、そういうイタズラ大好きですし……」

「それでも…… ひどいよ」

シユンと頂垂れるフェイトを見て、エリオとキャロはこの熱々な二人の關係ににんまりとする。

何度も繰り返されている光景だが、そこに飽きは来ない。あるのは…… 暖かい愛のみ。

「でも大丈夫ですよ。ヴィヴィオ、魔法も戦技も勉強するのが好きですから、できることは何でも試してみたいんですよ」

「ヴィヴィオはあれでしっかりしています。心配ないと思いますよ。兄さんもボク達に詳しく報告してきますし、大丈夫ですよ」

「……うん？ それでそっちはどう？ お仕事の調子は？」

「今日もホントに平和でしたよ」

「今やっている希少種観測ももうすぐ一段落ですから、来月にはフェイトさんのところに帰れそうです」

「本当？ じゃあ、私も休暇の日程調整してみるね」

「はい」

「お買い物行きたいですゝ」

それから、三人は最近あったことをお互いに報告しあい、楽しい時間をごした。

一方市民公園に向かっているサリエル達は……

「…………ん？」

「どうしたの、お兄ちゃん？」

後ろの方から何か強い気配を感じて、その方に目を向けてみる。

住宅街で適度に身を隠せる木々が生い茂っている。先ほどからつけられていた感覚もあるが……

もし、なのはさんかヴィヴィオのストーカーだったらここらでボコボコにしておいた方がいいな。

「いや、ちよつとヘルメスを忘れちまってな。取りに戻るから先行つていてくれねえか？」

「珍しいね。サリエル君がデバイス忘れるなんて……」

「俺も人の子ですから…… ヴィヴィオのこと、頼みますね」

「わかったよ。それじゃ、先行っているからね」

俺はその場に立ち止まって、ヴィヴィオとなのはさんが見えなくなるのを待つ。

そして、二人の姿が完全に見えなくなったら、先ほど強い気配を感じた方向に再度目を向ける。

ヴィヴィオ達が動いてもついて行かないか？　なら、俺のストーカー……？

やれやれ…… テレビとか雑誌とかによく出ているからな。今の内に止めさせるか。

「そこに隠れている奴、出てきな。」

「………… お気遣い感謝します。」

と、影から出てきたが曇っているせいか、顔がよく見えない。しかし、声から若い女性ということだけが分かった。

まあ、若いから年上に憧れるってあるからな……しょうがないか。
しかし、少女の発した言葉がサリエルの考えを打ち砕く。

「……時空管理局戦技教導隊所属、サリエル・フォーゼオンとお見
受けします」

「ああ。そういう君は？」

「カイザーアーツ正統、ハイディ・E・S・イングヴァルト。『覇
王』と名乗らせていただきます」

雲の合間から出てきた月明かりに照らされて、バイザーで顔を隠し
た16、7歳の少女が悠然と名乗り上げた。

第一教導 四年後……いきなりびつくり展開！？（後書き）

新作連載スタート。とにかくがむしゃらに頑張っていこうと思います。

Vividはまだ連載中という事もあり、先の見えない道のりになりそう。

とくにDSAAの辺りどうしようかと今から悩んでいます。

こんな駄作ですが、これから付き合ってください。

それでは、次回にまたお会いしましょう。

第二教導 決闘……青の重騎士VS霸王。 （前書き）

作者「今作のモットーは……一週間に最低一回更新!! 皆さん、こんにちは!!」

サリエル「それはいいが……で、なんだこのタイトル？」

作者「ん？何か文句でもあるのか？」

サリエル「クライマックス過ぎるだろ!? もうちょっと考えてタイトルつけるよ!!」

作者「いいじゃん。別に間違っていない。」

サリエル「はあ……せっかく続編だっていつのに……もっと新鮮味を出していこうぜ？」

作者「私は古き良き時代が好きでね」

サリエル「ダメだこりゃ。それではどうぞ閲覧してください」

作者「感想、意見、質問はいつでも待ってます」

第二教導 決闘……青の重騎士VS霸王。

サリエルが霸王と名乗る少女と会っている頃、ナカジマ家では……

「……連続傷害事件？」

「ああ、事件ではまだ無いんだけど」

「どゆこと？」

自宅で団らんしていたチンク、ノーヴェ、ディエチ、ウエンディはギンガからの通信に耳を傾ける。

この四人は海上隔離施設から出た後、ゲンガ・ナカジマの娘として社会に復帰している。

チンクは管理局へ勤め、ノーヴェも救助隊とバイトに精を出している。ディエチ、ウエンディも同様だ。

「被害者は主に格闘系の実力者。そういう人に街頭試合を申し込んで……」

「フルボッコってわけ？」

「そう」

「あたしそーゆーの知ってるッス！！ 喧嘩師！！ ストリートファイター……」

「ウエンディ、うるさい」

「ウエンディ正解。そういう人たちの間で話題になってるんだって。被害届が出てこないから事件扱いではないんだけど、みんなも襲われたりしないよう気をつけてね」

「そう……」

「気をつける？ 来たら逆ボッコだ。」

「物騒なことを言うな、ノーヴェ。それで……これが容疑者の写真か？」

「ええ。自称『霸王』イングヴァルト」

「それって……」

「そう。古代ベルカ……聖王戦争時代の王様の名前」

ギンガの話を聞いて、四人の顔が一気に曇る。

何せこの霸王という古代ベルカつながりで関係がありそう人物を二人も知っている。

そして、この連続傷害……その二人の命が危ないかも知れない。

「とにかく気をつけること。帰ったら、詳しいことは話すからね」

ギンガの通信が終わり、再び弛緩した空気が部屋を包み込むが……四人の顔はまだ強張ったままだ。

そこに一番上の姉であるチンクが最初に切り出した。

「イクスとヴィヴィオが危ないかもしれんな。」

「ああ。いつ襲ってくるかもわかんねえし……」

「私、一応サリエル達に連絡しておくね」

「頼む……後は私達か」

直接本人に危害を加えられないとなると、身内に危害を加える可能性がある。

しかも相手はただの喧嘩師の可能性もある。狙われるのは必然的に二人に近い存在で、ある程度強い人物となる。

「ノーヴェはこれから気をつけた方がいいッスね」

「ああ。もしあったら返り討ちにしてやるけどな」

「でもサリエルも危ないよね？ 頻繁にテレビとか雑誌に出ているし……」

「……」

ディエチの一言で三人はサリエルがもしその霸王と会ったときのことを考えてみる。

たっぷり数瞬、三人は同じ結論に達した。

「……注意したところで聞くような奴だったら苦勞はしない」

「そうッスね。サリエルって、どこかドミナンス姉と似ているし」

「まあ、あいつなら心配ないか」

三人はのんきに笑って、結論を出す。

あのサリエルにそんな心配は余計だと。

しかし、サリエルを慕っているディエチだけは……拭えない不安をどう処理するか困っていた。

かくして三人が考えている通りになっていた。

霸王と名乗った少女の言葉を聞いた瞬間、サリエルは一気に警戒を強めた。

何せ、最近管理局でも噂になっている。

「霸王」と名乗る喧嘩師まがいの野郎が時々ストリートファイトをしていると。

まさか……俺が狙われるなんてね。

「……モテる男は辛いつてね。で、俺に何の用？」

「あなたにいくつかお聞きしたいことと確かめさせて頂きたい事が……」

「では、質問から受け付けようか？」

「伺いたいののはあなたの知己である「王」達についてです。聖王オリヴィエの複製体クローンと冥府の炎王、イクスヴェリア。あなたはその両

方の所在を知っていると思います。」

「……」

なるほどね……古代ベルカ絡みか。

所在を聞いて、積もり積もった恨みを現代で晴らす……お決まりの行動だな。

だとすればここはバカ正直に答えるのはただのアホだ。

炎王については俺は別件でミッドチルダを離れていたからあんまり知らねえけど、オリヴィエの複製体^{クローン}については思い込みがありすぎる。

何せヴィヴィオの出生はまさにそれだからだ。ここら辺でこいつを分かせておかないとヴィヴィオが危ない。

「悪いが……どちらも知らねえな」

「なぜですか？現にあなたは先ほどそれらしき人物とっ」

「あれは俺の姪っ子だ。そんな大それた血筋は引いていないぜ？」

「……分かりました。この件は他を当たる事にしましょう」

俺に聞いても無駄だと知ったのか、意外にあっさりと引いてくれた。しかし、これ以外に確かめたいことって……何があるんだ？

「ではもう一つ……確かめたい事はあなたの強さと私の強さ……一体どちらが上なのかです」

「……いいだろう。ここじゃ人目が付く。場所を変えよう。」

サリエルが背を向けて、歩き出す。それに霸王も付いて歩く。なるほど……自分の強さを知りたい輩か。

どうして武道の道を進む人は、こういう事を知りたがるのかねえ？望みが高ければ高いほど、強さを知りたがる傾向がある。

そんな物知ったところでなんにもならない。俺はそれをよく知って

いる。

まあ、大きな壁にぶつかることはいいことだからな……遠慮なくぶつかってもらおう。

そうしてついたのは豪邸の建設予定地だった。ここなら広いし、壊れるものは何もない。

「お気遣い感謝します。」

「あそこら辺は人目がつくからな。俺も困るし、お前も嫌だろ？」

「はい。では防護服と武装をお願いします。」

「いらねえよ。俺はそんじゃそこらの輩とは鍛え方が違うからな。」

背を向けていたサリエルが胸ポケットから紐を取り出し、下ろしていた髪を結ぶ。

イングヴァルトはその間、軽く体をほぐしながらサリエルを疑う。

こんな軽薄な男が管理局でも有数の実力者？

信じられない。先ほどから注意深く見ているけど、強者特有のオーラが見受けられない。

実力者には少なからずオーラがあるのに……この人はそれを感じられない。

話を聞いていて偶然見つけたのはよかったものの、なんという徒勞感。

王の事も聞けなかったし、今回は収穫はなさそうだ。

「強さを知りたいなら……まずは大海を知る事だな。」

「っ！？」

「どうした？ 間合いだぜ？」

髪を結び終え腰を落として構えたサリエルを見た瞬間、自分の考えが間違っている事に気づいた。

先ほどはこれっぽっちも感じられなかったオーラが湯気のように立

ち上り、構えから来る威圧感も半端無い。

そして何より違うのはオーラの質。今まで闘ってきたスポーツマンとは違う、まさにむき出しの武術を体現しているようだ。

イングヴァルトの胸が一段と高鳴る。

この人なら、私をさらなる高みに連れて行ってくれるかも知れない。そんな淡い期待を込めて、イングヴァルトは威圧感に挑むように構える。

「……ふっ!!」

「っ!？」

鋭い踏み込みからの貫手。それをサリエルは首を振って辛くもかわす。

続けざまにステップを軽快に踏み、胴体の下から一撃を繰り出す。

しかし、サリエルは体を捻ってそれを避けた。

さらに踏み込んで、ハイキック。頭を屈んだ避けたところに返す刀で踵落としを出す……

屈んだ体勢から張り付かれる。踵落としは止められ、軸足を払うように蹴られて体勢を崩す。

慌てて攻撃に備えて体を捻って空中で立て直すが、当のサリエルは一旦間合いを取った。

先ほどから思ったが、あの人が攻撃する意志はこれっぽっちも感じられない。

「……どうして攻撃しないのですか？」

「ん？ いや、戦いの中で見るって大切だからな。俺はそれを実行したまだよ。」

「ふざけてるのですか？」

「全然。さっきの一攻防で大体の実力は分かったよ。スピードもあるし、手数も多い。いやいや……その年でそれだけでできれば十分だ。

」

こんな寝め倒しているのに、先ほど感じた威圧感は消えない。
来る……そう思ってたイングヴァルトは、防御を固めた。

「だけどさ……当てられないようじゃ、意味ないよね？」

「さっきの踵落としなんか惜しかったと思いますが？」

「あんなもの……あんたが勝手に俺の誘いに乗って来たただけだろ？
普通ちよつと実力のある奴でもハイキックはあんな風に屈んで避けようなんて思わない。バックステップを取るか、打点を殺すために前に出るかだろ？」

「それは……」

考えてみれば、あんな風に屈んで避けるのは素人がやる事だ。
それをこの人がやるとは考えにくい。ならば私は誘われていた？
そしてまんまとそれに乗って体を寄せられて、軸足を刈られた。

「本当の攻防って言うのはな……こういう事を言っただよー！」

構えもせずにほぼノーモーションで突っ込んできた。

サリエルは頭狙いの肘打ち。イングヴァルトはそれに合わせてカウンターの取るうとするが……

「ボディをカバーしな。」

「えっ……っ！？」

サリエルはそう呟くと、ヒョイと肘を引いて合わせられたカウンターの右拳をいなす。

肘打ちはフュイントで、本当の狙いはボディ。左拳が唸りをあげてイングヴァルトを肉薄する。

呟かれてとつさにボディをガードするが、その上から叩かれた。ガードしたにもかかわらず、胴体にその衝撃が響く。イングヴァルトはこの理不尽な重さに目を白黒させる。

「響くだろ？ 今流行のスピード重視の格闘は確かに見栄えがいいが……一撃の重さが無い。」

「くっ……」

「本来ならスピードとパワーを両立してこそ一流なんだが……今回はお前向けに見せてやるよ。」

無造作に踏み込んで、最短距離で拳を突き出す。

そのまったく無駄のない動作にイングヴァルトは驚きながら、何とか捌く。

相当の腕はあると見ていたが、これほどとは……

負けじと自分も攻撃するが……クリーンヒットが取れない。

見に徹していた先ほどとは違い、こちらの攻撃も当たる。だが、拳に手応えを全く感じない。

攻撃が当たる瞬間、微妙に芯を外されているのだ。

なんて巧妙なディフェンスワーク。

イングヴァルトに焦りが生まれる。いいのを入れないとリズムに乗れない、技をつなげられない。

「いい攻撃が入れられなくてどうしようって焦ってるな？」

「っ！？」

「顔に出すぎ。それじゃあ心理戦で常に風下に立つ事になるぞ。」

「余計なお世話です！！」

仕方がない。ここは一度流れを戻すために……

スタンスを広く取って、足先から足先から練り上げた力を拳足に乗せて打ち出す。

狙いは胴体。クリーンヒットすればダウンは必須、そうでなくても相当なダメージを負うはずだ。

「霸王断空拳！！」

イングヴァルトの放った直打がサリエルのボディを襲おうとするが……両手を回転させてまるで葉っぱが水の流れに乗るかのようにいなされた。

不可解な回避法に驚き、自ら一度距離を取った。サリエルは後退を潰そうとせず、まるでしてやったりとニヤニヤしながら、腕をさすっていた。

「つと……あぶねえあぶねえ。」

「……なぜ、あれがいなせるのですか！？ あれは受け流すだけじゃ到底っ」

「ちよつとしたマジックさ。さっきみたいに腕を回転させて攻撃の軌道を変えたのさ。俺は職業柄色々な技法を知っていてな……格闘教導でよく使っているんだよ。」

「……なんて人」

軽いサリエルの言動に衝撃を受けているイングヴァルトを尻目に、サリエルは冷めていった。

拳を合わせて分かった事……この霸王様は過去の事にご執着している。

そんなもの……執着したところで強くなるわけがないのに……なつたとしてもすぐに頭打ちだ。

過去の自分を省みて、そのことは痛いほど分かっている。

ここで勝たせて、これ以上被害出されてもこっちが困るし第一負けてやる趣味はこれっぽっちもない。

なら、差を見せつけて負かそう。

そんな事を考えているサリエルを隙だらけと感じたのか、貫手を放ってくる。

首を振ってよけたものの、多少タイミングがずれたのか頬を浅く切ってしまう。

それほど鋭い貫手を持っていないが……

吹き出た血を舐めて、サリエルは改めて考えを固める。

ちんたら闘うのはやめだ……

ミドルキックをかましてくるイングヴァルトに、体を滑らせて肉薄し蹴りを殺す。

滑らせた勢いをそのままに掌底……いわば突っ張りを喰らわす。

小柄なイングヴァルトはその掌底で体を宙に浮かせながら、少々後ろに吹き飛んだ。

サリエルは一度呼吸を整え、終わらせるために前に出る。

「でえええい!!」

「っ!？」

やっと体勢を立て直した所に顔面への強打。その実にわかりやすい狙いでイングヴァルトは両手をクロスさせて頭部をカバーするが……その衝撃に驚いた。

先ほどボディに受けたときは別次元の攻撃。こうしてガードしても頭を揺らされる。

返す刀でがら空きのボディを殴る。まともに喰らってしまい、悶絶する。殴られた衝撃で肋骨がミシミシと悲鳴を上げる。

倒れかけたところを何とか堪えて、攻撃しようとするが……そんな暇はくれない。

「せえいりいやあ!!」

またも顔面狙いの打ち下ろし。なんとか防ぐが、またもガード越し

で衝撃が伝わってくる。

これはもう……殴るじゃなくて、叩きつけるに近い。それぐらい威力があるのだ。

攻撃は単発で終わるものの、そのつなぎに全く隙がない。先ほどより若干スピードは落ちたものの、パワーは先ほどと段違いだ。

無駄のない純粹な格闘術、綺麗事を嫌ったむき出しの武術。

インクヴァルトはサリエルの攻撃をできる限りさけ、直撃のみガードに徹した。攻撃も考えたが、実行に移した瞬間倒れているのはこちらだ。

何せこの人はこうして圧倒的に攻めているのにもかかわらず、いつでもカウンターを撃てる状態なのだ。

残された攻撃手段として……カウンターがある。幸い攻撃は見えているので合わせれば……

そう思い、サリエルのストレートに被せてクロス・カウンターをかまそうとするが……一番必要ないものが頭をよぎってしまった。

この攻撃に……カウンターを成功させる？

例えるなら導火線に火がついたダイナマイトを点火する直前で消すようなものだ。

失敗すれば、自身に多大なダメージを喰らう。そんな恐怖がインクヴァルトの頭によぎった。

「はっ！？」

集中力の欠いたカウンターが成立するはずがないと自身が一番よく分かっている。慌ててカウンターを止めて、かすりながらも避ける事に成功した。

だが、サリエルはその隙を逃さない。鋭くミドルキックでインクヴァルトの胴体を蹴り、余りある脚力で吹き飛ばす。

それに合わせて、サリエルも宙を飛ぶ。狙いは左肩関節……外せば激痛で戦闘不可能だ。仮に続行してもその部分を執拗に攻撃すれば、

誰だつて音を上げる。

何とか持ちこたえたインクヴァルトは万事休すと思われたが、ここでサリエルの打ち方に奇妙な隙を見出す。

……あそこにカウンターを打ち込めれば！？

もうここしかない。自身の持つ最高の技で勝負を決する。

すぐさま構え、先ほどと同じように直打を放つ。

サリエルも足を地面につけて、着地した勢いをそのままにチョップを打ち込む。

「おおおりやつー！！」

「霸王断空拳！！」

チョップがあたった瞬間、左肩からボキリと嫌な音が聞こえた。

しかし、それでも自分の拳は見事に隙があつた胴体……水月に……目に見えたのは……片手ながらも水月を見事にカバーされた自分の拳だった。

嘘ッ……あれほど大きな隙だったのに？

インクヴァルトは激痛が走る肩を押さえて、一度距離を取る。サリエルもその場で何もなかったかのように構え直す。

「安心しな。折れちゃいねえ……ちよつと肩を外させてもらっただけだ。」

「痛う……あれだけ大きな隙があつたのに、なぜ防御できたんですか？」

「俺は人一倍目がよくてな……見えたから空いていた右手で防御できた……さ、分かつたら帰りな。」

「なぜです！？ 私はまだやれますー！！」

「さっきまでの攻防で分からねえかな？ 俺は相手の弱点を躊躇無く攻めるタイプだぜ？」

「っ……」

確かに……この人なら左肩を徹底して狙ってくるだろう。今なお走る激痛がさらにひどいものになれば、勝負にならない。

悔しそうに唇をかみしめ、肩を押さえてインクヴァルトはその場から立ち去った。

完全に立ち去った事をわかったら、ようやく緊張の糸を緩め……吐いた。

「ゲエエエ……ウエ……ゴホッ、ゲホッ……」

終わった安堵感からではなく、間違いなく先ほど片手でガードした霸王断空拳のダメージだ。

くそっ……やっぱり避けとくべきだったな。片手じゃ到底防ぎきれない事は分かっていたのに……

ひとしきり吐いて、仰向けになる。体がひどく重い上に鈍痛に犯されている。

インクヴァルトは巧妙なディフェンスワークと評したが、あれはあくまでクリーンヒットさせないだけでダメージを無しにするのではない。

ただサリエルはやせ我慢していただけだ。しかし、顔に出さないのもまた技術。相手に弱みを見せた時点でこちらの心は負けている。

しかしまあ……破掌まで出してこの様か……本気を出さなかった俺も俺だがな。

『マスター、大丈夫ですか？』

「ああ。これくらいの傷、何ともないが……これじゃ、家に帰れない」

『どうしますか、主？』

「とりあえず実家に連絡する」

コンソールを操作して、この時間実家にいるはずである人物に連絡を取る。

しばらくして、通信が繋がりモニターに映ったのは……

「はい、どうしました？」

「悪い、ウーノ……喧嘩で相打ちになっちゃった」

「またそんな……で、私にどうしろと？」

「このままじゃ、家に帰れない。とりあえずそっちに行きたいから迎えに来てくれ。場所は追ってグラディアスが送る」

「はあ……分かりました。迎えに行きますので、フェイトへの言い訳を考えておいてくださいね」

頭を抱えて嫌みたっぷりに言われてしまった。

さて……なのはさんとフェイトにはどうやって言い訳しようかな？
そのことをウーノが車で迎えに来るまでずっとうんうん言いながら考えていた。

その頃、インクヴァルトはというと……

「ッ……」

息をするたびに肩に激痛が走る。

ガードした腕がじんじんと痛む。

脇腹も回し蹴りを受けた腹部もひどい痛みだ。

本来なら、負けていて当然……だけどあの人は勝負をつけなかった。
とにかく今はこの痛みを止めたい。

辺りを見渡したインクヴァルトは一番平らそうな場所に肩と垂直になるように拳を置く。

そして……勢いよく押し込む。ボコツと音と共に肩関節がはまったが……

「~~~~~っ!？」

想像を絶する痛みにはばくその体勢のまま動く事ができなかった。やがて痛みが治まり、肩を回してちゃんとはまっている事を確認して自分の荷物が置いてある場所へ歩き出す。

その道中、先ほどの戦いを顧みる。

私は……弱いからあんな風に押された？

違う。私の体は間違いなく強い。それなのに押されたのは私の心が弱いからだ。

あまつさえ相手に自分の土俵が上がってもらってこの体たらく。今回の相手の本分は剣。それすら抜いてもらえなかったという事は本気で相手にしてもらってなかったのだ。

涙が出てきそうなほど情けない。カイザーアーツをコケにされたも同然だ。

一体どのように鍛えたらあのように強くなれるのか？

私は……このままじゃいけないのに……

今は亡き霸王の悲願を達成しなくちゃいけないのに、私は……

涙を堪えながら、インクヴァルトは一人夜道を歩く。

そして、決意する。失った尊厳を……自分の存在意義、カイザーアーツを証明するために……

もう一度鍛え直して、あの人に再選を申し込む。

その時は……本気で来てもらう。

インクヴァルトが決意している一方サリエルは実家にいた。
ウーノの部屋で傷の手当てを受けている間、家にいた全員……グラ

イド、エレア、ウーノ、トーレ、セツテから質問攻めにあった。

「一体どこのどいつにやられたんだ？」

「最近噂になっっているだろ？ 格闘系の実力者を襲っている奴……イテテテテッ！？ ウーノ、もつと優しく!!」

「自業自得です。あなたはこうも厄介事に首を突っ込むんですか？」

「……わかんねえ」

「全く……我が息子ながら、もう少し自重を持って欲しい物だ。せっかく管理局でも評判のフェイト君を嫁に迎えたというのに……これでは愛想を尽かされてしまうぞ」

ショットグラスに入ったブランデーを煽りながら、父……グライド・イシュバロンは釘を刺してくる。

現在はシュバリエネットワーク事件の事後処理の功績が認められて、大將に昇格。これにより現職の管理局員でもっとも発言力がある地位へと上り詰めた。

しかし、当の本人は年だから一歩引くと言ってあまり発言はしない。主に名義貸しをしている程度である。

「大丈夫ですよ。この子達の絆は生半可なものじゃありませんから。そう簡単に別れたりしませんよ」

「そうだろうか……しかしまあ、すっぱりと切れたものだな。」

「貫手だし、結構実力あったからね……それに俺も剣も銃も抜かなかったし、これぐらいは許容範囲だよ」

「全く……余裕を見せるからそうなる。サリエルは剣を持って一流銃を持って二流、それ以外は三流だ。なのに相手の土俵で闘う真似なんてするから……」

「分かっている事だよ、トーレ」

「軽くスキャンしましたが、目立つのは頬の傷程度で後は打撲だけ

でしょう」

「ありがとう、セツテ」

一応消毒して、止血パッチを張ったらこれで完了だ。
釘を刺す意味かウーノは叩くようにパッチを張って、てきぱきと救急箱をしまう。

その横でトーレがフェイトと通信している。言い訳……頼んだ通りにしてくれるだろうか？

「ああ。帰る途中に偶然会ってな……家で呑もって事になったのだ」

「そうなんだ……今日中に帰って来れそう？」

「……無理だな。なぜかベロンベロンに酔っぱらっている」

「それじゃ帰ってくるのは無理そうだね」

「とりあえず今夜はこちらに泊めるという事でいいか？」

「うん。制服もそちに置いてあるだろうし、私は構わないよ」

「すまない」

「いいつて、トーレ。サリエルには飲み過ぎないように注意してね」
「分かった。それじゃ」

どうやら簡単に信じてくれたようだ。良心が痛むが素直に家に帰ってあれこれ聞かれるよりマシだ。

フェイトの場合、執務官という地位を存分に使ってあいつをすぐさま捕まえるかも知れないし……

拳を合わせてもう一つ分かった事は、あいつは性根は素直である事。素直で何かに打ち込んでいる奴に基本悪い奴はいない。

性根が曲がっていて、悪ならば俺が捕まえている。だから、ああやって逃がしたのだ。

「……ったく、私にこういう事を頼むなんて……」

「悪いな。それで……明日の予定は？」

「休息がてらの書類仕事です。しかし、部隊長が私達だけで事後報告をした事に大層ご立腹でしたので……」

「俺だけ、何か追加されると？」

「ああ」

「はあ……まあ、いいや。とりあえず明日考えよ」

「では、これでお開きかな？」

「そのようですね。じゃ、皆さん……お休みなさい」

親父と母さんが出て行き、続いてトーレとセツテも出て行った。
俺も出て行くこうとするが……

「今夜はここで寝てください」

「おいおい、俺だって男だぜ？ ウーノみたいな美人といっしょに寝たら……」

「体、簡単に動かないと思いますから」

確かに……打撃を受けたせいではなかなかどうして……

自分の部屋まで行くのは億劫だな。かと言ってベットでいっしょに寝るのは……

「失礼します。お布団一式をお持ちしました」

「ありがとうございます。じいや。ベットの横に敷いて置いてください」

「畏まりました」

……まあ、それが普通か。

敷いてもらった布団に横になりながら、じいやに礼を言う。

横になれば、今日の疲れが一気に出てきたようで眠気が襲ってきた。
ウーノはというと、預かったグラディアスとヘルメスのメンテナンスに取りかかっている。

イシュバロンの養子になってすぐにマリーナがデバイスマイスターとして育成するため、強引に弟子にした。

当初ウーノはドミニランスが言ったようにゆっくりとスカリエッティに従う以外の生きる意味を見つけていこうと考えていたが、この時点で破綻。

以後、マイスターとしての道を進む事になった。元々興味があったことなので、よかったらしい。

今ではマリーナの助手をしながら頑張っている。そして、マリーナからグラディアス、ヘルメス専門の整備士として任されている。

この希代のマイスターが作ったデバイスは他の技師では到底まともに整備できないほど精巧に作られているため、それを任されるという事はマイスターからしたらすごい事である。

「……ヘルメスの調子はどうですか？」

「ん〜……一年使って、感触はいい。だけど、もう少し引き金を軽くできないか？」

「調整しておきますね。他には？」

「ヴァリアブル・バレットの弾速をもう少し速くしたい。それから……」

サリエルが眠りに落ちるまで、二人は世間話を絡ませながらデバイスの調整をしていた。

今日もまたミッドチルダの夜は更けていくのであった。

第二教導 決闘……青の重騎士VS霸王。 （後書き）

漫画にオリジナルストーリー付け加えるのって大変だね。

しかも……サリエルの圧倒的だけど、頑張れば倒せる感を出すのが難しかった。

次回はアインハルトの思いがけない再会を書きたいと思います。
それでは

第三教導 日常……教導官の一日。（前書き）

サリエル「……え、予定より二日も遅れてすいません」

作者「理由はといいますと……考えがまとまらなくてダラダラと書いていたのが原因です」

サリエル「それだけじゃないだろ！？ 今更こち亀を一巻から読み始めやがって……あれ、全部で175巻もあるんだぞ！？ 正気か！？」

作者「正気だ！！ その上で書き上げて見せりゃ！！」

サリエル「その言葉、絶対忘れないからな！！ それではどうぞ閲覧してください」

作者「感想、意見、質問はいつでも待っています。」

第三教導 日常……教導官の一日。

翌日、サリエルはひどい筋肉痛に悩まされながら起床した。

すでにベットの上で寝ていたウーノはおらず、枕元に新品の航空隊の制服が置いてあった。

制服を手早く着て、みんなが揃っているであろう食堂に向かう。

ウーノの姿はすでに無く、親父、母さん、トーレ、セツテがのんびりと朝飯を食べている。

俺もそれに倣って席に着き、朝飯が運ばれてくるのを待つ。

「そつえば、ラグナ……これからは気をつけた方がいいぞ」

「はっ？ 何で気をつけないといけねえんだ？」

「お前が逃したという霸王……喧嘩師は少なからず自分の強さに自信を持っていた。その自信がお前によって粉々に打ち砕かれたのだ。復讐してくるかもしれないし、もっと卑劣な手でお前を傷つけるかもしれない。そのことを頭に入れておくんだな」

「はっ！！ 不意打ち上等、闇討ち上等。行状坐臥の気持ちがないや、教導官なんてやってらんねえよ」

「……もう一つ忠告しておく。お前の体はもうお前一人のものではない。独身ならばその考えは許されるかもしれないが、所帯を持つとそうも行かない。愛する者、お前を慕う者、目をかけてくれる者、それら全てのものになるのだ。そのことを噛みしめて、これからの行動を考えるのだな」

「……ごちそうさん」

付き合ってもらえないとばかりに、サリエルは席を立つ。

じいやに二、三言付けてから一度部屋に戻る。

その様子にグライドは深いため息をついて、トーレ達を見る。

あれはどうにもならないと肩をすくめて意見するトーレ。

無関心で黙々と朝飯を食べ続けるセツテ。

その様子にさらにため息をつくグライドであった。サリエルはというと、一旦自分の部屋に戻り机の上に置いてあったグラディアスとヘルメスの起動テストをしていた。そこに先ほど言付けたじいやが入ってきた。

「ラグナ様、頼まれたものをお持ちしました」

「悪いな、じいや」

「いえいえ……それでどれを選びになりますか？」

そう言つて差し出してきたのは、タバコ……普通の紙巻タバコから噛みタバコ、葉巻に電子タバコ……果ては嗅ぎタバコまである。

迷わず電子タバコを手に取り、スイッチを入れて吸い始める。部屋いっぱい柑橘系のさわやかな香りが漂い始める。

サリエルは教導官になり立ての頃、格好つけるためにタバコを始めた。

最初は普通の紙巻タバコを吸ったのだが、猛烈な煙たさと匂いが嫌で一本で止めた。フェイトや他の知人から注意された事も起因である。

そのため、代わりに吸い始めたのは電子タバコ……ニコチンを含まないフルーツカートリッジを装着したものだ。

これならニコチンやタールを摂取しないので体に害はないし、ちょっとした香水代わりにもなる。

……タバコを吸い始めた理由は他にもあるのだが……いつか説明しよう。

一度大きく水蒸気を吐き出し、一服つける。

「……なあ、じいや」

「なんでしよう？」

「もし……俺が死んだら、じいやは悲しむ？」

「もちろんでございます。あまりの悲しさに後を追ってしまつかもしれません」

「そうだよな……」

親父の言いたい事はよく分かる。天涯孤独ならまだしもこうして多くの人とつながりを持っている以上、この体は自分一人のものではない。

そんなことはとつくの昔に分かっている。結婚してまだ半年も経ってなかった頃、ある調査でちょっと重い怪我をした。その時のフェイトの取り乱しようと来たら……

自分を大事にしなくちゃいけないのも分かる。だけど俺は大事にして大切な人が傷つくぐらいなら、大切な人を守って自分が傷つく。矛盾しているが、おれは常にこう思っている。

もう一度吸い、思いを吐き出すかのように水蒸気を吐く。

「サリエル、そろそろ行くぞ」

「ああ。じいや、行ってくるよ」

「いつてらっしゃいませ」

最後の水蒸気を吐きだして、電子タバコをじいやに返す。

所属する班の自分の机の中にまだ予備がある。

とりあえず今はこれで落ち着いた。

制服を羽織り直して、サリエルはトーレの車に乗り込み、職場へ向かう。

所属している戦技教導隊……本部は本局にあり、そこから教導官と事務官を数名から数十名集めた「班」といういくつかのチームで編成されている。

サリエルが所属している班は、かつて1562航空隊の部隊長であり、機動一課を経て昨年戦技教導隊に転属してきたガロン・ナイベル二佐の班で、なのはもこの班に所属している。

職場……ミッドチルダ中央の郊外にある隊舎につき、三人はセキユリティシステムにIDカードを差し込んで中に入る。
ロビーで新聞を読みながら、くつろいでいるのは……ガロン班長であつた。

「おはようございます、班長」

「ああ。今朝はチームでご出勤か？」

「ええ。実家に帰っていましたが」

「そうか。サリエル、三十分後に俺の部屋に来い。それまでは書類仕事だ」

「了解であります」

妙にかしこまった口調で返事しているが、内心げんなりしている。突っ立っていても意味がないので、とりあえず自分の部屋に向かう。入ってすぐに目についたのはちよつとした山になっている書類……おそらく前にやったテスト装備の書類評価やその他諸々の確認事項の書類だろう。

はあ……とため息をつきながら、自分の机に座る。

トーレもセツテも与えられた机に向かい、少しだけ何もしなかった。

「……案の定、呼ばれたな」

「しょうがないさ。班長の言う事だし、ちゃんとしてあげますよ」

「……その潔さがたまに羨ましいです。それはそうと、サリエルはなぜ班長とあんなに親しいのですか？」

「私も気になるな。経歴にはそれらしいつながりはないと思うのだが……」

「うーん……長くなるから、帰ってきてからな。さて、仕事するぞ」

「了解」

適当に書類を分けて、三人は一斉に取りかかる。

しばらくはコンソールの叩く音と時折、確認を促す声と質問する声が部屋に響き渡る。

真面目にやっていたいれば時間が経つのは早いもの。あっという間に三十分たった。

「サリエル……そろそろ三十分かと？」

「ん？ ああ、それじゃ行ってくるわ。基本的に二人の判断に任せるけど、重要そうな書類は俺の机に回しておいてくれ」

「分かった」

引き出しから電子タバコを一本取り出し、胸ポケットに入れて班長室に向かう。

三階建ての隊舎の一番隅……本来物置などに使用するのだが、ガロン班長は隅がいいと言って、強引にこの部屋にしたらしい。

昔から性格が変わってないと失笑したものだ。そんな事を思いながら、ドアをノックして入る。

「サリエル・フォーゼオン空曹、参りました」

「よし……まあ、適当にかけてくれや」

「失礼します」

近くにあったソファに腰掛けて、班長の言葉を待つ。

最初出会った頃から少々老けたが、逆に渋みが増したため昔より貫禄が出ている。

そう思っていると、凜々しいひげを蓄えた口から重く、硬質な声が出てくる。

「どうだ……お前が引き取ったあの二人は？」

「トーレは元々教育していたせいか、そつなくこなしていました。セッテに関してはまだまだ慣れが必要かと……」

「そうか。お前の予想通りというわけだな」

「はい。後体力もまだまだ足りてないと感じましたね」

「それはこれからつけていくものだ。お前みたいにアホほど鍛えて
いる奴はそうそういない」

しゃべりながら、班長はタバコに火をつけて一口吸う。

うまそうに煙を吐くのを見届けて、サリエルも自前の電子タバコの
スイッチを入れて吸う。

「……つたく、本物のタバコにしろよ」

「タバコは体力落ちますから……隊長も禁煙したらどうですか？」

「できていたらとくにやっている」

「ですよ……航空隊の時から、禁煙すると言ってはすぐに吸って
いましたから」

「……あれからもう何年経った？」

「……八年ですね。俺と班長が出会ってから……もう八年ですよ」

二人は遠い目をして、あの頃の事を思い返す。

夢と希望……そして強さを追い求めていた十代。

そんなとき、当時1562航空隊の部隊長であったガロン・ナイベ
ル三佐と出会った。

出会ったばかりの時はただの一隊員として覚えられていなかったが、
ある事件を境に目をかけてくれるようになった。

サリエルが隊員から陰湿ないじめを受けていて、それが任務にまで
持ち込んだため、それを知ったガロンはサリエル以外の隊員を半殺
しの目にあわせた。

この時、これほどまでに部下思いで熱い人はいないと思った。これ
以降、サリエルはこの隊長についていくことを決意した。

ガロンもあれだけ陰湿ないじめを受けたにもかかわらず、やめなか
ったサリエルを強い子だと思い、期待を持つようになった。

それから隊の空気が一変して、サリエルをよくする先輩隊員も増え、サリエルもそれに応えるかのように強くなっていた。

「最初入ってきた時は……まあ、強くはなるだろうと程度のイメージだった。しかしな、いじめを知ってからこいつは精神的にも強いなとイメージが変わったよ」

「あの頃はひどかったですよ。さすがにリンチはありませんでしたが、ロッカーへのいたずら、陰口、訓練中の故意の誤射などいろんなことされましたからね。まあ、あれがあつたからあの後起こった事件もあの程度で済んだと思います」

「あれかあ……俺はいまだに後悔しているよ。あの時なんで強引でもいいから連れて行かなかったのかって……」

「過ぎたことを後悔しても何もできませんよ。今はこうして、一緒に隊になれたのですからいいじゃないですか」

「そうだな。それで今回呼んだのは……」

こつこつ昔話をして、ようやく本題に入った。

二人ともここからは真面目に話し合い、今度の教導先、装備のテスト日程、休暇などの調整などを詰めてサリエルは部屋を後にした。時計を見てみると呼ばれてから結構な時間がたっていた。急いで部屋に戻り、すでに半分以上自分の分を終わらせていたトーレとセツテに謝りながら、書類仕事に取り掛かる。

「……それでどうだったのだ？」

「ん？ まあ何もなかったよ。ちよつと昔話をして、これからの予定詰めていただけ」

「意外ですね。昨日私達と話していたときはあのクソ野郎と罵っていたのに……」

「口ではそう言っているけど、意外と部下思いなんだよ」

「それはひしひしと伝わってくる。それはそうと、何で親しいか話

してくれるか？」

「ああ。あれは……」

そこから仕事をしながら、身振り手振り交えて班長との出会いを語り、自分の過去を話していく。

トーレとセツテは出会いの話は素直に耳を傾け、過去については自分達が独自に入手したものはほとんど違う事に驚きながら、サリエルの過去に同情する。

午前の勤務時間も過ぎ、昼食まで続いた話も佳境に入った時に通信が入った。

「ここからはお前らも知っているように……っと、はい？」

「あつ、サリエル？ 今大丈夫？」

「おう。どうした、ディエチ？」

通信してきた主はディエチだった。どうやら休憩時間に合わせてかけてくれたらしい。

ナカジマ家の娘になったチンク、ノーヴェ、ディエチ、ウエンディとはよく連絡を取り合ったり、トーレ達といっしょに買い物などしている。

しかし、今回はそういう誘いではなさそうだ。ディエチの顔がそう語っている。

「最近格闘技者が襲われるっていう噂、聞かない？」

「まあ、よく聞くな。それがどうした？」

「実はその噂の犯人……古代ベルカ絡みでヴィヴィオが狙われているかもしれないかも……だから、私達の方でヴィヴィオの周辺を注意していいこうって思っているんだけど……」

「……そ、そうか」

「ん？ どうしたの、サリエル。顔が青いよ？」

「そ、そんな事はないぞ。至って、普通だ」

サリエルの背筋にたらりと冷たい汗が流れる。

実はディエチが言った噂の犯人とは……すでにやり合っているので、知り合いも知り合い。殴り合った関係だ。

この心配性で俺の事を慕ってくれるディエチにそれが知れたら……無用な心配をかけてしまう。

俺としてはそう言うのは勘弁願いたい。フェイトもそうだし、このディエチも何かと俺は無茶しがちと思っているらしい。

昔はそうだったが、今では分別のできた大人だ。もうそういう事は何かとんでもない事が起こったときにしかしないと決めている。

ちらりとトーレ達を見てみると、口パクでなぜか……言っておけと伝えてくる。

（おい、何だよ！？ 無用な心配かけるじゃねえかー！）

（すでに会敵したならその事実を言っておく方がいいではないか。追い払ったと言えば、余計な面倒をかけなくても済む）

（でもなあ……本当に言うの？）

（ああ。ディエチは強い子だ。お前が言い聞かせれば、ちゃんと理解してくれるはずだ）

そうだといいいんだが……仕方がない。

ここは素直に言っ、後はこっちで何とかするっていう方向で収めようか。

「……その犯人、霸王って名乗っているだろ？」

「うん。古代ベルカの王様の……って、何でサリエルがそれを知っているの？」

「実はもうその霸王と会った。ていうか、闘った」

「ええっ！？ まさか、そのほっぺの傷も……」

「その時にできたものだ。だけど安心しろ。俺がきつちりっ」

「他に怪我は！？ 打撲とか切り傷とかないよね！？ あと骨折とか大けがしていない！？」

闘ったと聞いた瞬間、ディエチはアタフタとして他に怪我はないかと聞いてきた。

予想はできていたが、いざやられると何もしていないのに悪い事をした気分になる。

…… 実際悪い事に近いのだから、その感覚はおおむね正しいのだが…… 釈然としない。

とりあえず落ち着かせよう。これじゃ、話もままならない。

「ディエチ、落ち着け。とりあえず、話を聞こうか？」

「本当に大丈夫！？ 肩甲骨の裏側の肋骨はギブスも当てられないから厄介なんだよ！？」

「お前がどうしてそんな医者しかわからないような骨折を知っているかは分からないが…… 話を聞いてくれ」

「う、うん……」

「確かに俺は霸王と会って、やり合った…… だけど、この傷以外は何も怪我しちやいないし、きつちり追い払った。まあ、炎王と聖王の事について聞かれたが、知らぬ存ぜぬを通したぞ」

「そ、そうなんだ。だけど…… 本当に大丈夫なの？」

「ああ。お前が思っている無茶はしていないし、なんにも心配ないよ」

嘘も方便…… 実際は相手の土俵で闘うという無茶をしたし、全身筋肉痛であの強烈な打撃を受けた水月も未だに痛い。

正直に言ったところで何も生まない。生むとしてもさらなる心配のみだ。

そんな自分勝手な言い訳を自身に聞かせながら、安心させるために

言葉を紡ぐ

「サリエルがそう言うのなら……信じるけど、昔みたいに無茶だけは絶対しちゃダメだよ？」

「わかってるよ。いざとなればトーレやセツテも守ってくれる。だから、ディエチが心配しなくても大丈夫だ」

「……それなら、安心かな」

「安心なのだ。それはそうと、今何してるんだ？」

「イクスのお見舞いに来てるんだ。よかったら、ノーヴェ達に代わるうか？」

「いや、いい。ノーヴェはともかくウェンディはうるさくて敵わないから……」

イクスの所つてことは……聖王教会か。

予想だけど、チンク辺りが騎士カリムと霸王について何か対策していそう。

それならこちらとしても安心だけど……後はヴィヴィオか。

俺が追っ払ったとはいえ、また襲来してもおかしくはない。

ちよつと警戒だけしておくか。

「じゃあ、そういう事だから……無茶だけは絶対にダメだよ？」

「わかってるつて。また今度買い物行こうな？ ディエチに服、選んでもらいたいし」

「うん！！ それじゃあね〜」

ディエチとの通信を終え、食べかけの昼食を処理していく。

セツテもそれに倣って自分の昼食を再開し、トーレも再開しながらこちらにフツと柔らかな笑みを向けてくる。

「……なんだ？」

「いや、ホント……お前って私の妹達に好かれているなって、思っ
ていてな」

「今更何を……」

「姉上達はお前の事を心から信頼しているし、かと言う私もお前の
事を信頼している。チンクもお前によくいろんなことを相談してい
るみたいだし、セツテやオットー、デイドも顔に出さないがお前
を好いている。セイン、ノーヴェ、デイエチ、ウエンディは言わず
もがな……元々敵同士だった私達がいまやお互いを認め合い、信頼
し合っている。これは一つの奇跡だと……私は時々思うのだ」

確かに……この四年間、時々思っていた。

ドミニランスとは競い合うライバル。ウーノはグラディアスとヘル
メスの専属マイスター。トーレとセツテは部下。チンク達は友達。
今はこうして仲良くやっているが、四年前のJS事件では敵同士と
して対立し合っていた俺達。

普通なら今も憎み合っているもおかしくはない。ましてやドミニラ
ンスなどと、会った瞬間殺し合いを始めてしまうくらい憎み合っ
ているかもしれない。

しかし、蓋を開けてみれば……こうしてうまくやっている。

昨日の敵は今日の友ということわざを聞くが……これほどうまくい
った例は過去無いだろう。

「それは……多分俺の人柄だろう？」

「断じてあり得ません……と言えないところが悔しいです」

「そうだな。八神やテストロッサ、高町にはよくしてもらったが、
お前ほど私達の事に尽力を尽くしてくれた奴は他には知らない」

「スバルもティアナも頑張ってくれたぞ。あいつらに比べたら、俺
は毛のほどもしてない」

そうしらばくれるサリエルだが、二人はしっかりと理解していた。

サリエルは相手を認めない限り、上司でも頭を下げる事はない。しかし、私達が入局する時色々な所に頭を下げにいったらしい。その中に毛嫌いする古参の幹部や陸の連中、グライドも含まれている。

仲間が困りそうな環境になる前に、自分を犠牲にしている環境を作ってくれた。

……と、ある夜に酒が入ったグライドから語られていた。その時の衝撃といったら……

「さ、メシ食ったら地上本部に行くぞ。何でもこの前のテスト装備の改良が終わったらしい。その視察に行けたとさ」

「了解」

ちよつと慌ただしくなった昼食を終わらせ、三人は地上本部に向かう。

教導隊といってもただ他の隊を教導するだけではない。武装隊が使う重装備や、地上部隊や航空隊が凶悪犯を確保するための道具などのテストも行う。

今日本部に来たのは、先日サリエル達がテストした凶悪犯確保の飛び道具なのだが……

「……これが改良された奴ですか？」

「ええ。犯罪者捕獲トリモチランチャー「トーチャ・ラック」です。あなた達から頂いた注意点を元に、徹底した改良を加えた事でより一層よい物へと進化いたしました」

「具体的にはどのような変化が？」

「まず、無誘導から誘導式にしました。誘導方法は赤外線、レーダー、熱源反応の三つを両立。そして弾頭に設置されたセンサーで犯人の目標の三メートル手前で破裂。高速で吐き出されたトリモチで犯人を確保するという画期的な物になりました」

「ふむ……」

制御室から外の実験風景を見る。

確かに高速で動くターゲットを確実に捕捉して、きっちり三メートル手前で弾頭からトリモチが発射されている。
これなら並の犯罪者なら捕まるが……

「カタログデータを」

「ここに……」

今時珍しい紙資料で書かれたデータをじっくりと見ていく。
弾速、総弾数、発射動作の手間……数々のデータを見て、サリエルは一言きっぱりと告げる。

「……使い物にならないな」

「えっ？」

「なぜ弾頭をもっと犯人の手前で破裂させる事ができない。これでは逃げられてしまうぞ？」

「それは……」

「世の中には三メートルも距離があれば避ける奴がいるんだ。それぐらい考えればすぐに分かるだろ……それと、トリモチで捕らえた後はどうするんだ？」

「専用の除去剤を使って剥がしますが……」

「現実的じゃないな。テストを見てみる限り、トリモチは結構多いしそれを剥がすとなると大量の除去剤が必要になってくる。それに広がりすぎて一般市民にも被害が出るかも知れないしな」

「……」

「分かったら、再提出。今度はもっとマシな物を頼むよ」

カタログデータを返して、三人は出て行く。

後ろでは技術者がデータを挟んでいるクリップを渾身の力で握っているのが感じ取れた。

しかし、サリエルはそれを知っていながらも辛辣な言葉を出したのだ。

「サリエル、ちょっといいすぎではないのか？」

「いいや、むしろ足りないくらいだね。トーレ、セツテ……お前達があれば使う側だったらどう思う？」

「取り回しが悪そうですね。弾速を出すために長くしたバレルが原因だと思います」

「単発式ではな……しかも次弾装填に10秒もかかれば犯人に逃げられる」

「だろ？ しかもコストも高いと来ている……あれがもし正式採用されていたら、たちまち現場から苦情が殺到する事になるぞ」

「なるほど……」

「しかも今更トリモチ弾って……拘束網も効果があることを知っていてこれだからな……まったく、あのマッド共が……」

確かに重く、初速の遅いトリモチより、初速が遅くてもトリモチより軽く、範囲が広い網を使った方が効果的だ。

やはりあくまで現場重視……データ上の話なんて端っから信用しないのがサリエルだ。

実際に使ってみて……肌で感じ取ってできあがった物しか使わないのだ。

徹底した現場主義……だから、サリエルは信頼できる。

しかし、この主義のおかげでよく上層部から嫌われているみたいだ。もつとも、そんな物はどこ吹く風と本人は気にしていないようだが

……

「さて……後2、3カ所回らないと……早く終わらせて、定時には

帰るぞ。今日は直帰でいいって言っていたしな」

「久しぶりにゆっくりできそうだ」

「そうですね。昨日なんて誰かのおかげで夜遅くまで仕事させられていましたからね」

「〜」

口笛を吹いてしらばつくれるサリエルに二人は大きなため息をついた。

だが、それでも……この男は信頼できる。

やるときはやってくれる。だから、私達はついて行くのだ。

口には絶対出さないが、トーレ達はサリエルには分からないように笑みを浮かべて後ろをついて行くのであった。

午後いっぱい技術部を回り、通信で班長に報告したら今日の業務はそれで終了だった。

とにかくトーレ達に家まで送ってもらって、そこで別れた。

「ただいま」

家に帰ってきてみるも、まだ誰もいない。どうやらフェイトはまだ仕事しているらしい。

とりあえず服を着替えて、ほっぺに張つてある止血パッチを剥がす。鏡を見て、傷が残っていないかチェック……大丈夫そうだ。

「さて……たまには自炊するか」

『今日は何にしますか？ 参考レシピを開きましようか？』

「いや、いい。俺は適当、フェイトにはしっかり食べてもらおう」

『……どこまでも妻思いなことだ』

いつもいつもなのはさんのところでお世話になるわけにはいかない
しな……

昨日みたいに特別な事がない限り、二人はなるべく自炊するように
している。

どちらかが先に帰れば、帰ってきた方が作る。そうした方が夫婦の
絆も深まるし、どちらかが倒れたときでも困らないからだ。

実際サリエルは航空隊時代に趣味程度に料理していたので、それな
りに作る事是可以る。

冷蔵庫の中身を確認して、何が足りないかを頭に記憶する。

大体記憶したら、ヘリオンに乗り込み近くのスーパーへ向かう。

所帯持ちで男がスーパーに向かうって……なんか、虚しいな。

『その考えは至極古いものです。女性の社会進出が当たり前になっ
た今、夫も台所に入るべきです』

「いや、それはわかってるけど……」

『それなら早く買い物しましょう。奥さまもいつ帰ってこられるか
分かりませんからね』

「OK」

スーパーに入って三十分後、両手に野菜、肉など諸々が入った袋を
持って帰宅する。

急いで冷蔵庫に入れて、自分が食べるために必要な食材をまた取り
出す。

とりあえず今日は……

「鶏肉が安かったから、グリルにして……後は、サラダとみそ汁だ
な」

『……なぜみそ汁を?』

「なんとなく飲みたいし、たぶんフェイトも飲みたいだろう。作り

置きしておけば、明日の朝も飲める」

『そうですね。ではレシピを……』

「いらね。こんなものは自分の感覚で作るもんだ」

手際良く鶏肉に下ごしらえをして、野菜をちぎっていく。主食であるご飯は出かける前に炊飯ジャーのスイッチを入れてきた。

鶏肉をオーブンに入れたら、次は味噌汁の具材を用意する。わかめ、大根、えのき……真正銘日本の味噌汁だ。

材料を切り分け、粒状ダシを入れて、煮立ったら具材をダシに入れて味噌をとかす。

完全に溶かしきったら、一煮立ちさせる。その間に焼き上がった鶏肉にガーリックを軽くかける。

全ての動作がよどみなく、それでいて丁寧だ。

『……主、主夫になるっていう手もっ』

「うるせえ！！ 今度言ったら無理矢理解体するぞ！！」

『すいません』

どうやらやぶ蛇だったようだ。

さつきは分かっていると云ったが、やはり根本的に台所に立つのは嫌らしい。

取り決めがあるため、仕方が無くやっているのだと言いたそうだが、それにしても動作があまりに洗礼されている。そのことをグレイdiasが突っ込もうとするが、先ほどのヘルメスの件があるのでやめておいた。

そうこう言っている内に、全てできあがったらしい。テーブルに一人分のご飯、チキングリル、サラダ、味噌汁が並べられる。

「よし、こんな物だな。自分で作った割にはうまそうだ」

『今メールを受信しました。奥様、三十分もすれば帰ってくるそう

です』

「そうか。それじゃ、ちゃっちゃんと食っちゃまうか」

軽く手を合わせて、器用に箸でご飯を食べていく。この男、本当にミッドチルダで生まれたのだろうか？

テレビを見ながら二十分で食べ終わり、食器を流しに持って行って、ちよつと書籍データを展開していると……

「ただいま」

「おかえり」

フェイトが帰ってきた。すぐにサリエルが玄関まで迎えに行く。

「今日はサリエルの方が早かったんだ？」

「定時だからな。メシ、まだだろ？」

「うん。お腹ペコペコだよ」

「作ってやるから、リクエストしろ」

「ん……それじゃ、あっさり系でたくさん食べられるもの」

「了解。ちゃっちゃんと作るから着替えてきな」

「はい」

そう言つて、フェイトはシャワールームに入っていく。

さて……リクエストにあっさり系でたくさん食べられるもの、かそんなレシピあるか？

『マスター、ここはオーソドックスに野菜炒めでも……』

「だめだ。先週もやし炒めをしているから、二番煎じだ」

『では主、ここはポトフでも……ヘルシーな上に数も用意できます』

「だめだめ、あんな時間がかかる料理……煮込むのに三十分はかかるぞ？」

『じゃあ、どうするのですか？』
「そうだな……」

冷蔵庫の中身を確認して、今作れる物を手当たり次第思い出す。
牛肉があるが、これであっさりした物は考えれない。豚肉は厚く切った肩ロースだから冷しゃぶ用じゃないし……やっぱりここは鶏肉か。

大根を買ってきたから、下ろしてポン酢かけて……

「そうだ！！ みぞれカツレツにしよう！！ これならあっさりしているし、量的にもばっちりだ！！」

『では、すぐにレシピを……』

「一度作った事があるから、大丈夫だって。よし、まずはパン粉を……」

カツレツに必要なパン粉と卵数個、豚肉を冷蔵庫から取り出し、取り出した豚肉を取り出して、包丁で叩く。こうする事で肉が柔らかくなる。

次に卵を割って、その中にパルメザンチーズ、オリーブオイル、塩を混ぜ合わせて卵液を作り、豚肉をくぐらせる。

パン粉をつけて、フライパンに油を多めにひいた頃にフェイトがシヤワーから上がって私服に着替えていた。

「わあ……凝ってる物、作っているね」

「ああ、カツレツだからな。大根下ろしをつけてあっさり仕上げる予定だ」

「楽しみ〜」

パン粉をつけた豚肉をフライパンで焼きながら、味噌汁を温め直す。ついでにサラダの用意もしながら、フェイトにお茶を出しておく。

くどいようだが、その動作は本当に主婦顔負けの物だった。

「……サリエル、やっぱり主夫には……」

「止めてくれよ、フェイト。それ言われると、結構傷つくんだぜ？」

「あはは、ごめんね」

妻にまで言われたら、もうどうしろって言うんだよ。

そう独りごちながら、きつね色に揚げたカツレツを皿に盛りつけ、その上にポン酢がかかった大根下ろしをのせる。

その後、適温に温まった味噌汁をお椀につぎ、千切ったレタスとキヤベツ、缶詰のコーンを小鉢に盛りつけて、上からごまドレッシングでサラダ完成。

やっとこさ、フェイトの夕食ができあがった。

「よしっ……上出来だな」

「すごい。あの短時間でこんな凝った料理ができるなんて……」

「そう褒めるな。さて……食べてくれ。味は保証できないがな」

「サリエルの作る料理にハズレなんて無いよ。いただきま〜す」

男の俺が作った料理を嬉しそうに食べるフェイト。

それを見ていると、なんだがちょっと嬉しくなってきた。

やっぱり……愛する人に何かできるって、幸せな事だよな。親父も何かするときはこういう気持ちになるのだろうか？

……ってか、何で親父のことが出てくるんだ？

かんがえてもしょうがない。何か飲むものは……

そう思っただてきたのは……ちょっと前にもらったワインだ。

確か班長からもらった物だよな。基本酒は飲まないけど……たまにはいいか。

「珍しいね。サリエルがお酒って」

「たまにはな……それになんにもなしでフェイトの食事に付き合うのはなんかつまんねえし……」

「ふふふつ、ありがとうね」

軽く飲んでみると、意外にうまい。ワインって、安物だと渋かったりするんだけど……これはちがうな。

ワインの味を楽しみながら、フェイトと今日あった事や昨日の事をおもしろおかしく話していく。

フェイトが食べ終わっても話は弾み、いっしょに洗い物をして、一息つけるために一度ソファに座る。

サリエルは読みかけの本を開け、フェイトもなにやら料理雑誌を開いてゆつくりする。

そこに……

「やつほ、サリエル」

「ん？ スバルか、どうした？」

意外にも珍しい人物から連絡が来た。

スバルやティアナ達とは定期的に連絡を取っているが、まだその時期じゃなかったはず。

頼み事か、もしくは遊びの誘いだな。

「明日って、大丈夫？ 予定が合えば、いっしょに遊ぼうよ」

「ん……ちよつと、待ってくれ」

ヘルメスに今日更新したばかりのスケジュールを展開させて、明日の予定を見る。

……休みになつてら。あの班長、昔は教導終わった後にまた教導入れたぐらいこき使ってやがったのに……

所帯持ちになるとやつぱり待遇も代わってくるのかな？

まあ、休みは休み。そうなれば、後はフェイトの予定だな。

「フェイト、明日は仕事か？」

「うん。朝早くから調査があるんだ。サリエルは？」

「悪いな……休みだ。スバル達に誘われているけどいいか？」

「スバル達なら行ってあげなよ。私の事は気にしなくてもいいからさ……」

「すまないな。スバル、許しが出たからいいぞ」

「ホント！？じゃあ、明日十時にいつものカフェで待ち合わせね」

「分かった。それじゃ、明日な」

「うん」 バイバイ

明日の約束を取り付けたスバルは上機嫌で通信を切った。

俺も読んでいた本に目を戻そうとするが、そこになにやらクッションを抱いてこちらをじっと見てくるフェイトが目に入った。

……はあゝん。どうせ、また嫉妬してるんだろう……まったく。ちよつとからかってやろう。

「なんだ、また妬いてるのか？」

「別に……いいな、休みて。ここしばらく二人で休日過ごした記憶無いし」

「しょうがないだろ？六課時代に付き合ったときから覚悟していた事なんだから……」

「そうだよ……サリエルは教導官だし、私も執務官……お互い忙しいのは分かってるけど……」

珍しく弱音を吐いている。何か仕事で嫌な事でもあったのか？

元気づけるためにフェイトのそばにより、肩を抱いてやる。すると、甘えるかのごとく肩に頬をすり寄せてくる。

フェイトが俺に甘えるときの動作だ。これは付き合ってからすぐに

発覚した。

普段シャキツとしている分、仕事から離れたときの反動が結構ある。それが今の状態だ。

「……いつそのこと、専業主婦になろうかしら？」

「フエイト……」

「そうすればいつでもサリエルのことを考えられるし、サリエルに主夫みたいな真似させなくても済むし、それに家だって……」

「フエイト」

髪を撫でながら、優しく名前を呼ぶ。

まずいな……大分ストレスが溜まっている証拠だ。

こんなに弱音がポンポン出てくるほど今抱えている案件はきついのか？

これは、教導官でたまにはやてさんやフエイトの捜査の手伝いをする俺には……わからないことだ。

それでも……すこしでも支えてやりたい。

「……今日は抱きしめて寝てやろうか？」

「うん。ずっとギュツとしていて欲しいの……」

「わかった」

……強壮薬、飲んでおこ。

どうせ抱きしめてると我慢できなくなるし、最近ご無沙汰だったかなをおさらだ。

フエイトが人の温もりを求めているときはOKの合図だってことも知っている。

その後、しばらく寄り添って静かに髪を梳いてフエイトの温もりを感じていた。

こうして、サリエルの夜は更けていった……

第三教導 日常……教導官の一日。（後書き）

どうしてこうなった？

本当ならアインハルトと再会させる予定だったのに……

いろんな事書いていたらいつの間にか一万文字超えていた！？
しょうがない……次回回そう。

では、次回は再開にヴィヴィオとのスパーリングを一気にやっちゃ
つたいと思います。
それでは

第四教導 再会と出会い……霸王と聖王。 （前書き）

作者「もうすぐ夏休みも終了か…… みなさん、こんにちは」

サリエル「この作品も早くも四話目か…… 約一ヶ月つて所だな。」

作者「再誕の頃は序盤ハイスペースで書いていたからな。今回は比較的落ち着いて書いているよ」

サリエル「……こち亀読みながら？」

作者「記念すべき110巻まで読み終えたぜ!!」

サリエル「……とりあえず、この作者を一回ぶち殺さない……この性格は直らないな」

作者「そんな物騒なことを言うな。それでは、どうぞ閲覧してください」

サリエル「感想、意見、質問はいつでも待っているぜ。あと、人物紹介も更新したので是非見てくれよな!!」

第四教導 再会と出会い……霸王と聖王。

午前九時、サリエル自宅にて……

「た、太陽が黄色い……」

憔悴しきったサリエルが布団から這い出てきた。

昨日は頑張りすぎた。まさか、フェイトがあんなに求めてくるなんて……

すでに朝早く出て行っただし、うる覚えのベットから出る顔は……ものすごくつやつやしていて、すっきりしていた。

どうやらちゃんとストレスを発散できたようだ。役に立てたなら何より。

俺も……そろそろ用意しないと。

のろのろと起き上がり、適当な服を出して寝間着のまま下へ降りていく。

リビングのテーブルには、朝食が用意してあった。それに書き置きも……

（昨日はありがとうね。おかげですっきりしました。朝食を作っておいたので食べてください。今日は楽しんできてね。愛してるわ、あなた。フェイトより）

「……まったく、俺にはもったいないくらいの妻だな」

昨日作り置きした味噌汁を温め直して、置いてある朝飯を食べていく。

サラダ、オムレツ、ほうれん草とベーコンのソテーと典型的な洋食だが、フェイトが作った物なのでうまい。

ゆっくり味わって完食し、洗い物を軽くして身支度する。

白のワイシャツにネクタイ、その上に黒のジャケットを羽織って、ちよつと色あせた黒のジーンズを穿く。

フエイトからもらったシルバーのロケットをつけて、バックルを巻いたら着替え完了。

髪は軽く梳いて、緩やかに流す。今日は荒事はなさそうだけど、一応まとめ紐を持っておこう。

リビングに戻って、テーブルの上に置いてあるヘルメスを首にかけ、グラディアスを胸ポケットにしまう。

戸締まりをちゃんとして、車庫からヘリオンを出させて出発した。やっぱり車よりバイクの方がいいなあ……この風を切る感触、気持ちいいよ。

『今日はどちらまで？』

「スバルと会うんだ。いつものカフェで待ち合わせ」

『それは楽しみですね』

スバルと会うのは久しぶりだからな……実際にちよつと楽しみだ。

しかし、この時期に何で遊ぼうなんて言い出したんだろう？

会ってから詳しく聞いてみるか。

バイクをクラナガン中央まで走らせ、適当なコインパーキングに止めて、待ち合わせのカフェに着くと……

「サリエル、こつちこつち」

「おう、久しぶりだな……って、ティアナもいたのか？」

「あら、悪いかしら？」

「いや……そんな事はないぞ」

席に着いて、やってきたウェ이터にココアを注文して下がらせる。しかしまあ……ティアナもいっしょだったのか。

たまに本局でちよくちよく会う事があるから久しぶりという感覚が

ない。

「それにしても……あんたのお子様趣味も変わらないわね？」

「ほつとけ。コーヒーとか紅茶は一切受け付けねえんだよ。オフィスにも専用のインスタントを置くぐらいだからな」

「あはは、サリエルらしいね」

「てか、今日は何でまた集まったんだ？ たまたま俺だけ休みだったからよかったものの……」

「それは後で説明するわ。さ、まずは買い物するわよー！！」
「……」

とてつもなく嫌な予感がしたため、スツと席を立とうとするが二人に腕を掴まれる。

もしかすると……いや、こういう場合の予感はずっと絶対を外れない。

二人はにこやかに笑って、こう告げてきた。

「荷物持ち、して」

……はははっ、今日の俺はなんてついてないのだろう。

この分だと何品か奢られる羽目になりそう……

紙カップで来たココアを受け取った途端に、スバルがその細腕からは考えられない馬鹿力で引っ張られていったのであった。

その頃、St・ヒルデ魔法学院初等科校舎図書室では、昼休みを利用してヴィヴィオ達がある調べ物をしていた。

「あつた、あつた！！これがオススメ。『霸王インクヴァルト伝』と『雄王列記』……あとは当時の歴史書」

「ありがと、コロナ？」

「前にルーちゃんにおすすめてもらったんだ」

コロナから受け取った歴史書を早速開いて、読んでいく。

「でも、どーしたの？ 急にシュトウラの昔話なんて？」

「うん……ノーヴェからのメールでね、この辺の歴史についていっしよに勉強したいって」

理由を説明して、三人は歴史書を読み進めていく。

クラウス・G・S・イングヴァルト。

戦乱のベルカの歴史に名を残した武勇の人であり、初代の霸王。

火炎の煙で薄暗く覆われた空と戦乱で荒れ果てた大地。

人々の血が河のように流れて、それが乾く間もなく続いた戦乱の時代。

誰もが苦しみ、乱世を終わらせたいと願いながら……だけとそのためには力を持って戦うしかなかった暗黒の時代の中で、クラウスは霸王としての短い生涯を全うした。

その短い生涯は、決して薄いものではなく濃密なもので悲しい事ばかりではなかった。

オリヴィエ・ゼーゲブレヒト。聖王家の王女として「最後のゆりかごの聖王」との共に笑い、共に武の道を歩み、研鑽の日々もあった。

「……なんか、ちょっと切ないね」

「最後の方はオリヴィエがクラウスのために自ら犠牲になった感じだし……」

「うん……この話を見ていると、放課後ノーヴェと会っただけ……まさか、霸王の血を受け継ぐ人に会わせるんじゃないかって、思っ
って……」

「……」

三人は顔を見合わせて……噴いた。
図書館なので、あくまで控えめに爆笑する。

「そ、そんなわけないよね？ プククツ……」

「そうだよ。まさかそんな偶然……クククツ……」

「私もそう思う……クフツ……新しく格闘技やってる子って言う
ているから多分違うと思うけど……」

「まあ、今は置いといて……イングヴァルトの歴史について勉強し
よ」

「うん」

ひとしきり笑って、再び三人は本に向かう。

一度本の世界に入れば、真面目に読み続ける。

それを昼休みが終わるまで続けて、午後の授業に望んだ。
もつとも……先ほど三人が言った事が現実になるとも知らずに……

一方、強制的にスバルとティアナの荷物持ちをさせられたサリエル
はというと……

「さて……このくらいかな？」

「服に、生活用品に、食材……これだけ買えばいいよね？」

「そうね……うん、久しぶりに買い物した〜」

「この光景を見て、何でそう脳天気にもその言葉が吐けるんだ!？」

現在サリエルの両手には衣服数十着が入った紙袋が片手に五個ずつ、
合わせて十個。

背中にはちよつと膨れあがったりユックの中に、生活必需品が多数

……その重量8キロ。

トドメに首からつり下げられた買い物袋が二つ……重量にして一つ三キロが首にぶら下がっているのだ。袋の間からネギがぴょんと出ている。

はつきり言つて……いつも厳しく教導する凜々しい姿からこの姿を見せられると……あまりにも哀れである。

「あら、これでもまだ少ない方よ？ 本当なら後二、三件は回る予定だったんだから？」

「ふざけんな！！ こんな丁稚奉公みたいな事させて、まだ回るつもりだったのか？」

「後、アイスクリーム屋さんにも行く予定だったんだよ？」

「お前は黙つてろ、スバル！！ バカみたいに食材買いやがつて……一ヶ月分だぞ、これ？」

「うっん、一週間分だよ？」

「……こんなに買つて、挙げ句の果てに奢らされたっていうのに一週間分……死んでいいですか？」

「そんな事言わないの。ほら、ここのカフェで待ち合わせだから」「へいへい……」

買い物の途中で聞いたのだが、今日は午後から誰か合流するらしい。それはいいのだが……これ以上荷物が増えるのは勘弁してもらいたい。

何かいい案はないかと考えたが……ふと閃いて、スバルの住所を聞いてからすぐに宅配代行サービスに連絡する。

今の時代、どんな商売でも成り立つのだ。この宅配代行サービスもその一つ。電話一本で自宅に多くなった荷物を全て運んでくれるのだ。

しかし、料金もそれなりにするので基本的に富裕層が利用するのだが、今回は四の五も言つてられない。

前払いで振り込み、すぐに取りに来ると言われて、来るまで午後から合流する人物を待つ事にした。

「サリエル、何か頼む？ 奢ってあげるわよ」

「いや、そこまで落ち潰れちゃいない。自分の分は自分の分で……」

「さつきチラツとクレジット確認したけど、三桁下回っていたよね？」

「……ゴチになります」

服を数種類奢らされたあげく、最後の食材でとどめを刺されたクレジットの残高を見て、どん底まで落ち込む。

給料日まであと一週間……俺、生きていけるかな？

「フェイトさんにお弁当作ってもらえばいいじゃない？」

「頼めていたら苦労しないだよ。フェイトだって、執務官で忙しいんだ。補佐しているお前が一番分かっているはずだ。」

「それはそうだけど……」

「てか、サリエルも教導官じゃん？ それなりにいいお給料はもらってると思うんだけど？」

「実際の所、一般局員とそんなに変わらんぞ？ 教導手当とかが付いて、ようやく上層部クラスに追いつくんだ。それだったら、スバルは特別救助隊だから基本給＋危険手当とか、金一封とかもらえるじゃねえか？」

「あつ、そっか」

「ティアナだって執務官だし、経費も出るんだ。おそらく俺の1.5倍はもらっているはずだ」

「……何であんたはそんなに私達の給料の事を知っているの？」

「一度経理の退役局員と飲んでね……その時にあれこれ教えてもらった」

さっき言った事はほとんど事実だ。

戦技教導隊と言えば聞こえがいいが、結局の所普通の管理局員が集まったものなので給料が上がるわけではない。

基本給は階級で決まるので、昇格すれば上がるが上がりなくてはそのままである。

そこに色々な手当が付いて、税金が引かれてようやく手元に来るのだ。

サリエルの場合、基本給＋教導があつた場合のみ教導手当が付き、これが相当な額である。

そして、他にも捜査依頼や手伝いなどがあつてさらに給料を増やしていく。

本来なら相当な額の貯金があるはずなのだが、半年前に一戸建てを現金払いで買ってしまったため、現在貧困に窮しているのだ。

「はぁ……ホント、どうやって生きていこう？ やっぱり班長に奢ってもらうしか……」

「何とかなるって……あつ、来たみたい!!」

スバルが手を振って、ようやく合流する人物と相まみえる事となつた。

遠くからでも分かるワインレッドの短髪……まあ、大体予想はしていたけど。

「よお、サリエル」

「ノーヴェか……久しぶりだな」

「ああ。それと今日はあたしだけじゃないんだ……」

「？」

後ろを親指でクイクイとさしているの、目を向けてみると……すでに着席したチンクにオットー、ディエチにウエンディ、ディー

ドが思い思いにくつろいでいた。
まさに……金魚の糞みたいだな。

「あたしが呼んだのはチンク姉だけだぞ!? 何でお前らまで揃ってんだよ!？」

「えゝ、別にいいじゃないツスカあゝ」

「時代を超えた聖王と霸王の出会いなんてロマンチックだよ」

「ん? 他にもまだ誰か来るのか?」

「ああ、ヴィヴィオとその友達。後はあたしが知り合った格闘技やつてる子だ」

「ふゝん……」

なるほどね。何となく読めてきた。

多分今回集まったのはノーヴェが知り合ったという格闘技者とヴィヴィオを合わせるためか。

でも、これだけ集まるとなると……何か一騒動あったようだな。席を移動して、ディエチの隣に座る。

「みんな、久しぶりだな。オットーとデードなんて前に仕事で教会に行ったとき以来だ」

「そうですね。あつ、サンドイッチ作ってきたのですが、食べますか?」

「気が利くねえ、オットー。お前はいい嫁さんになれる」

差し出されたサンドイッチをハムハムしながら、話を核心に持って行く。

「それで今日は何で集まったんだ? お前達がここまで集まるなんて滅多なことじゃないぞ?」

「実は昨日ノーヴェが噂の霸王に襲われたツス」

それを聞いた瞬間、ピシッと効果音が出そうなほどサリエルが凍り付いた。

ノーヴェが……あの霸王に？

だとすれば、俺が襲われた事も必然的に……

みんなの様子を注意深く観察する……しかし、誰も俺の事を追求してくる様子はない。

ホッ……ディエチは誰にも言っていないようだな。

「そういえばサリエルもングッ!？」

「腹が減っただろ、ディエチ？ この俺自らが食べさせてやるよ」

「ムゲグッ……」

無理矢理サンドイッチを押し込んで、ディエチの口をふさぐ。

それからきつく睨んで、俺が襲われた事を言わないようにと釘を刺しておく。

今ここで言えば、大騒動になるのは間違いない。言わぬが花だ。

「それで？」

「で、ノーヴェがうまい事その霸王つ子を捕まえて更生させたから、今日ヴィヴィオ達と会わすって事になったツスよ」

「私達も陛下にもしもの事があつてはと言う事で護衛に來た次第です」

「体のいい口実だな、まったく……」

「私も姉として一応止めたのだがな」

「仕方がないって。こういうお祭り事になるとこいつらは誰もとめられない」

「ホントそうだよ……まあ、見学自体はかまわねーけど、よけいなチャチャは入れんなよ？ ヴィヴィオもアインハルトもお前らと違って色々繊細なんだからよ」

「はーい」

ノーヴェの注意にディエチとウエンディが元気よく返事し、オットーとディードは親指をグツと立てる

その様子にサリエルとチンクは深い深いため息をついたのであった。

「ノーヴェー！！ みんなー！！」

「「こんにちは」」

「あれれ？ スバルさんとティアナさん……それにお兄ちゃんまで！！」

「よっ」

ようやくヴィヴィオが友達連れてきたようだ。

がやがやとみんながヴィヴィオを迎えて、ディードとオットーが恭しく席を用意する。

「あつ、お兄ちゃんにはまだ紹介してなかったね。コロナは去年の合宿旅行で紹介したから……リオだね。この子が友達のリオ」

「はわわっ……」

「どうしたの、リオ？ そんな声出して？」

「あつ、あの！？ サリエル・フォーゼオンさんですよね！？」

「ああ。いかにもそうだが？」

「きゃー……！！？ 本物だ！！ 雑誌見ました！！ TVも拝見しています！！」

いきなり素っ頓狂な悲鳴を上げて、俺の手を取ってぶんぶん握手してくる。

サリエルも最初はこの反応にビックリしたが、何度も同じ経験をしているのすぐに対応した。

その様子にティアナとスバルは目をパチクリさせて、疑問を口に出

す。

「……そういえば、サリエルって雑誌やTVに出ていたんだっけ？」
「管理局が誇る有数の若手ってことでイメージキアラとして登用されてるのよ。ルックスもまあまあだから、ちゃんとおしゃれして人前に出ればモデル顔負けよ。それにあいっ……仲間内ではああやってしているけど、基本的な性格は真面目だから好印象を持たれやすいからって理由で、選ばれたみたいよ」
「へえ……」

今思えば、確かにサリエルは有名人の一員だ。
まだその筋の人……格闘技者や一部のマスコミに限ってたが、その中でも頑張っているんだ。
いつもいっしょにいて慣れてしまったけど……改めてすごいと思った。

「噂には聞いていましたけど……本当にヴィヴィオのお兄さんだったなんて……」
「ヴィヴィオ、言ってなかったのか？」
「忘れてた……許して、お兄ちゃん」
「ったく……」

渋々ヴィヴィオを許しながら、先ほどやってきた宅配代行サービスの社員に荷物を渡していく。
その間に胸ポケットに常備してあるサングラスをかけておく。こうやって騒がれたら、何が起こるか分からない。

「それより……ノーヴェ、紹介してくれる子って？」
「さっき連絡あったから、もうすぐ来るよ」
「あっ、ありがとう、オットー。何歳ぐらいの子？ 流派は？」

「流派はまあ……旧ベルカ式の古流武術だな。あとアレだ。お前と同じ虹彩異色」

「ホントー！？」

オットーに進められた席に座らず、そわそわと待ち人を立って待つ。少しは落ち着けばいいのに……こういうところはまだ子供だな。

つと、俺もその待ち人の事をあんまり知らないや。あくまで覇王つてことしか分かってないからな。

「スバル、ノーヴェが紹介する子のこと、分かるか？」

「ん」と、ヴィヴィオに聞かれるとまずいからそんなに言えないけど……名前はアインハルト・ストラトス。ヴィヴィオといっしょの学校で中等部に通ってるんだって」

「まだ中坊？ ……そんな奴に俺は……」

「どうしたの？ いきなりブルーになつて？」

「いや、ちよつと心の傷をグサツと抉られただけさ」

マジかよ……中坊であんだけ強いってか？

世の中どうやってやがるんだ？ 昔のイキがつていた自分を今すぐ殴り倒したい。

ヴィヴィオにしろ、今俺が教えている秘蔵っ子にしろ、みんな才能ありすぎだろ！？

やつぱり時代の変化かな……俺もこの時代に生まれていたら、才能があつたかも……

そんな風にサリエルが落ち込み、他のみんなが思い思いにくつろいでいると……

「失礼します」

凜として、透き通るような声がこの喧噪の中に響いた。

皆が声のした方へ一斉に目を向ける。

「アインハルト・ストラトス……参りました」

まだできあがっていない体。品のある歩き方。それら全てがサリエルがやり合ったインクヴァルトと合致した。

しかし、ここで俺が出て行っても話がややこしくなるだけ……大人の風格を醸し出して、あとでゆつくりと話を聞こう。それに今回はヴィヴィオが主役なんだから。

「すみません、遅くなりました」

「いやいや、遅かね〜よ……でな、アインハルト、こいつが例の……」

「えと、初めまして！！ ミッド式のストライクアーツをやっています。高町ヴィヴィオです」

「……ベルカ古流武術アインハルト・ストラトスです」

握手を交わしながら、アインハルトは受け継がれてきた記憶とヴィヴィオを比較する。

（この子が……小さい手、脆そうな体……だけどこの紅と翠の鮮やかな瞳は、霸王の記憶に焼き付いた間違うはずもない聖王女の証）
わたし

古に亡くなったオリヴィエ・ゼーゲブレヒト。

その末代……とは言っても複製体だが、目だけはまさに生き写しだった。

「あの、アインハルト……さん？」

「ハッ……ああ、失礼しました」

「あ、いえ！！」

「まあ、二人とも格闘技者同士、ごちゃごちゃ話すより手合わせでもした方が早いだろ？　場所は押さえてあるから早速行こうぜ」

ノーヴェの提案に全員承諾して、押さえてある場所に向かう。

ぞろぞろと歩く中、アインハルトに近づこうとするがノーヴェとヴィヴィオに囲まれてできなかった。

ちよつと話そうかなって思ったんだけど……アレじゃ無理そうだな。そしてついた場所は区民センターのスポーツコートだった。

「よく押さえられたな」

「ちよつとしたコネでな……さて、ヴィヴィオ、アインハルト、着替えてきな」

「はい」

二人が着替えてくるのを待っている間、座っていたサリエルにノーヴェ、ティアナ、スバルの三人がなにやら詰め寄る。

「なつ、なんだ？」

「サリエル……あんた、何か隠してない？」

「アホくさ……俺が一体何を？」

「とぼけんな。アインハルトのこと、知ってるんだろ？　例えば……霸王だつたってこととか？」

「なつ、何を根拠に……」

平静を装うサリエルの背中にはまたしても冷たい汗が流れる。

ティアナは執務官のごとく吐くまで俺のことを解放しない構えだし、スバルはじつと俺のことを見ている。ノーヴェはゴキリと拳を固めて、力尽くで聞こうとしている。

「ばっ、万事休すか……」

スバルのあの目は細かい傷を探している目だ。六課時代から本人で

も気づかないような傷でも見つけていたから、これはまずい。

「さあ吐きなさい！！ 吐いたら、カツ井ぐらい奢ってあげてもいいわよ？」

「刑事ドラマか！？ 言っておくけど、何も知らないぞ」

「嘘言うな。お前が嘘つくときは大概目を逸らす」

「あつ、ヴィヴィオ達来たぞ！！ ほら、ノーヴェ、お前が行ななくてもいいのか！？」

「おつ、もう来ちまったか？ まあ、この話は帰りでもできるからな」

「覚悟してなさい。自白剤使っても吐かせるから」

恐ろしい……自白剤なんて最近の安い漫画でも使っていないぞ？

帰りは尋問か……それまでは、ヴィヴィオの成長具合でも見ておくか。

アインハルトの実力も見ておきたいし……実力があれば、俺の秘蔵っ子とやらせてみよう。

「んじゃ、スパーリング4分1ラウンド。射砲撃とバインドは無し
の格闘オンリーな」

「はい！！ アインハルトさん、よろしく願います！！」

「……はい、こちらこそ」

二人は間合いを取って構える。アインハルトの胸の内にはある思いがよぎる。

諸王戦乱の時代。武技において最強を誇った一人の王女がいた。
名はオリヴィエ・ゼーゲブレヒト。後の「最後のゆりかごの聖王」
かつて「霸王イングヴァルト」は彼女に勝利することができなかった。

そして、今のこの時、時代を超えて再戦することになった。

私の中に流れている霸王の血は歴史の中で薄れていくけど……時々その血が色濃く蘇るときがある。

碧銀の髪やこの色彩の虹彩異色。霸王の身体資質と霸王流。カイザーアーツそれらと一緒に少しの記憶もこの体は受け継いでいる。

私の中にある記憶は「彼」の悲願。天地に覇を持って和を成せる……

……そんな「王」であること。

しかし、弱かったせいでも……強くなかったせいでも……彼は彼女を救えなかった。守れなかった。

そんな数百年分の後悔が……私の中に堆く積もっている。

それが今日……ようやく受け止めてくれる相手が現れた。

だが、この子が本当に霸王の拳を……霸王の悲願を受け止めてくるのか？

「それじゃ……レディ・ゴー!!」

ノーヴェの合図と共にヴィヴィオが前に出て、鋭く相手の下からアツパー気味に拳を突き出す。

それを驚きながらもすっかりガードするアインハルト。周辺の野次馬はその攻防だけで感嘆の声を上げる。

そんな中、サリエルは二人の攻防を冷静に見極めていく。

続けざまに軽快にステップを踏み、左、右と連打を打ち込んでいく。

「ヴィ……ヴィヴィオって変身前でも結構強い？」

「練習頑張ってるからねえ」

「だけど、攻撃がまだまだ素直だな。もっとフェイントを入れてかないと……」

「それはあんただけよ。全く……捻くれてるからそういう発想しか浮かんでこないのよ」

「なんだと!? フェイントを入れることは至極当然のことなんだぞ!!! 武術でも虚実と言って、本命の攻撃を確実に当てるために

フェイントやわざと隙を作って攻撃を誘発させる技法があるんだ！
」

「はいはい、あとで聞いてあげるから」

「今はこのスパーに集中しようよ」

「ぐぬぬっ……覚えておけよ」

フェイントの大切さを言えなかったサリエルが歯ざしりしている間にもスパーは続く。

ヴィヴィオ特有の回転の速い連打をアインハルトはじつくりと捌くコンビネーションの変化にハイキックを繰り出すも、スウエーでうまくかわす。

連打を見極めながら、アインハルトは素直な感想を胸に吐く。

（真っ直ぐな技……きつと真っ直ぐな心）

拳を打ち込んでくるヴィヴィオの目はどこまでも真っ直ぐで純粋に輝いている。

（けどこの子は……だからこの子は……）

頭部に来たパンチをフツと腰を落として避け、カウンターで掌底を胸に打ち込んだ。

その勢いは凄まじく、体重の軽いヴィヴィオはいとも簡単に吹き飛ばしてしまった。

（私が戦うべき「王」ではないし……私とは違う）

吹き飛ばされたヴィヴィオは壁に激突する前にオットーとディードが受け止めてくれた。

すぐさま構え、ブルルツと体を感じで震わせる。

しかし当のインハルトは……

「お手合わせ、ありがとうございました」

背を向けて、もう用済みとばかりに礼を言った。

その態度にサリエルが無言でインハルトに詰め寄ろうとするが、すぐにスバルとティアナに取り押さえられた。ヴィヴィオは自分に非があるかのように謝る。

「あの……あのっ！！ すみません。わたし、何か失礼を……？」
「いいえ。趣味と遊びの範囲内でしたら十分すぎるほどに……」

それを聞いて、サリエルがさらに激昂する。スバル達が必死に押さえるがいつ解かれるか分からない。

ヴィヴィオのストライクアーツが……遊び？

ふざけるなよ……お前はヴィヴィオがどんな思いでストライクアーツを始めたか知ってるのか！？

それを知りもしないで……今度こそ、再起不能までぶちのめしてやる。

予想以上の力で解かれそうなので仕方なくディエチとチンクが加わってさらに押さえかかる。

そんなサリエルの空気とヴィヴィオの残念そうな顔を見たせいか、慌てて訂正する。

「申し訳ありません。私の身勝手です」

「あのっ！！ すみません……今のスパーが不真面目に感じたなら謝ります！！ 今度はもつと真剣にやります。だからもう一度やらせてもらえませんか？ 今日じゃなくてもいいです！！ 明日でも……来週でも！！」

「……」

ヴィヴィオの懇願にアインハルトは困り、チラリとノーヴェに目線を送って助けを求める。

それを見たノーヴェは頭を抱えて、妥協案を提案した。

「あゝ……そんなじゃまあ、来週またやつか？　今度はスパーじゃなくて、ちゃんとした練習試合でさ」

「ああ。そりやいいツスねえー！」

「ちよつとサリエル落ち着いて……私も二人の試合が楽しみだよ」

「ウガー！？　収まらねえー！！　スバル、ティアナ、オットー、デイドー！！　相手しろー！！」

「正気なの！？　四対一って……その前にあたし達に八つ当たりしないでー！！」

「うるせえー！！　オラオラオラオラオラオラ！！」

ついに押さえきれず、スバル達を吹き飛ばしてヘルメスを乱射しまくる。

そうなれば、みんな手加減知らずで仮借ない攻撃をぶち込んでサリエルを黙らせようとするが……百戦錬磨のサリエルはそれらの攻撃を全て捌いていく。

泥沼の乱戦を尻目に、アインハルトは言葉を紡ぐ。

「……あれ、放って置いてもいいのですか？」

「いいんだよ。いつものことだから……それで、どうする？」

「ノーヴェさんの提案を受けることにします。時間と場所をそちらにお任せします。」

「あつ、ありがとうございます」

何とかノーヴェの妥協案を受けてもらえたことを、ヴィヴィオはしっかりと礼を言う。

それを背中に受け止めながら、アインハルトは更衣室へ帰っていった。

その横では未だに乱戦が続いている。

「いい加減にしろ、サリエル！！ ランブルデトネイター！！」

「そんなものが通用するか！！ 俺を止めたきゃ、なのはさんかシグナムさんを連れてきな！！」

「だったら、これで……ファントムブレイザー！！」

「ハッハー！！ 久しぶりに血が滾るぜ！！」

チンク、ディエチ、ウェンディも加わって七対一と非常に不利な状況にもかかわらず、サリエルは生き活きして戦っていた。

それを目にしたノーヴェはため息をつき、ヴィヴィオは笑いながらも浮かない顔をしていた。

何とかサリエルの暴走を収めて、センターを出たらずでに夕日は沈み、辺りは夜の闇に包まれようとしていた。

今日の所はここで解散のようだ。アインハルトはボロ切れになったサリエルを持ったスバル達と帰り、ヴィヴィオはウェンディ達と帰宅するようだ。

別れ際、ノーヴェがアインハルトに気づかれないようにヴィヴィオに謝る。

（悪い、ヴィヴィオ。嫌い悪くしないでやってくれ）

（全然……私の方が「ごめんなさい」だから……）

そうアイコンタクトを取って、二組は別々に帰路についた。

引きずられていてようやく気づいたサリエルは、アインハルト側に回っていたことを知らずちよっただけ自分に泣きそうになった。

さすがに七対一はきつかった……やっぱり五分が限界だな。

「で、これからどうするんだ？」

「メシ食って解散。とりあえず、暴れたサリエルの奢りな？」

「はあっ！？ 俺、こいつらに奢らされてほとんどすっからかなんだぞ！！ そこからどうやってメシ代を捻出しろと！？」

「カードがあるでしょ？ それで払えばいいじゃない」

「……お前らは悪魔か？」

「よし、じゃあ適当な所に……」

スバル達がどこかゆっくり食べられる場所を探している間、サリエルはアインハルトとちよつとおしゃべりしようと考えた。

こいつがインクヴァルトって言うのがまだ信じられない。だけど今日の動きを見ている限りでは……

「今日はどうだった？」

「……収穫がありました。聖王に会うこともできましたし……」

「そうか。ハイキックもスウェーでかわすことができていたしな……

…感心感心」

「……この前はすみませんでした」

「気にしてねえって。ちよつと誤魔化すのに苦労したかな」

こうしてしゃべっているとやはりまだまだ子供だ。

素直に悪いことを悪いと受け止められる。そんな根の素直な子。

昔の俺とは大違いだ。頑固一徹、人の話を受け入れようともしなかったからな。

ポケットから電子タバコを取り出して、スイッチを押し込んで一口吸う。

「……タバコを吸われるのですか？」

「これはフェイク。ただの格好つけさ。それで……今日のことなんだが、ああやって自分の心を素直に吐き出すと敵を作るぞ？」

「でも、私は……」

「ヴィヴィオがアレを始めた理由は重い。詳しくは言わないが、自らの誓いを果たすためにストライクアーツを始めたんだ」

水蒸気を吐き出して、一息つける。辺りはミントの匂いで充満した。吸ってから少しすると……サリエルの目に暗いものが宿り始める。

「今日お前はそれを汚す暴言を吐いた。俺はそれが許せなかったから、お前をあの場でボコしてやろうかと思った……ま、全員に止められたがな」

「それは本当に悪いと思っています。ですが……私が求めていた聖王とはかけ離れていて……」

「……格闘技者に限ったことじゃないけど、なんでそこまで強さを求める？」

「えっ？」

「強さとは常に不平等の上にある。ある者は才能に負け、ある者は超えることのできない壁に諦め、ある者は届かぬ目標にひたすら走り続け、絶望する……そんな物をなぜ求めるのか？俺にはよく分からないな」

「私は強くなければならないのです！！先人の想いや後悔を晴らすために……だけど、それをぶつける相手は今の時代にはいないのです！！いつか現れるまで私は少しでも強くならないと……あなたもそういう思いをしたことがないのですか！？」

「あるよ。亡くなった人に追いつこうと必死に訓練して、工夫して……だけど無理だった、追いつけなかった……それに気づいて、ようやく俺は前に進めたんだ。今の俺を支えているのはある一人のライバルとの約束だけだ。それだけが今の俺の強さの支えになっている」

四年前にドミニランスと約束した「勝ち続ける」という枷。

これが今の俺の強さを支え続ける物だ。
勝ち続けるというのは、言葉にするのは簡単だが実行するととてもない困難がつきまとう。

ドミニランスならまだしも並の才能しかない俺にとってこれは非常にづらい。

しかし、ずっと守り続けている。いかなる時でも鍛錬を続け、暇があれば技法を取り入れようとしている。

約束を破るのは最強と評されて負けたあいつに失礼だと思うし、自分のプライドも負けることが許さない。

故に勝ち続けている。今のサリエルに与えられた使命である。

「俺が考えるに強さっていうのは、いかに自分を信じられるかだ。私は強くない、強くならなければ……」と言っている時点で自分を信じていない証拠だ。だったら、どう信じればいい？」

「それは……」

「日々の鍛錬、体を傷つけながら培った経験……この二つが自分を信じてやれる元だ。お前はそれが足りないから、そうやって昔のことを引っ張り出して支えにしまってるんだ。それだと、いつかポツキリと折れる。昔の……俺みたいにな」

タバコを吸って、一区切りつける。水蒸気を吐き出すと、先ほどまで宿っていた暗いものは消えていく。

アインハルトは悟ったように話すサリエルの手を見してみる。

ごつごつと男の手をしていたが、ささくれだっている指先はこれまでどれほど鍛錬してきたかを雄弁に語っている。

アインハルトからは見えないが、手のひらは岩のように硬い皮膚に覆われていて、指紋などほとんど消えていた。

血が滲み、デバイスの持ち手についた血が乾く間もなく鍛錬し続けなければ、こうはならない。

先ほど語っていたことは全て事実だと、納得せざるを得なかった。

「サリエル、アインハルト。見つかったから、行こうぜ!!」

「わかった。ま、よく考えることだな。これから自分はなんのために強くなるか、なんのために闘うのか……しっかりと意味を考えてな」

「……はい」

タバコをポケットにしまい、アインハルトを連れてティアナ達に追いつく。

うーん……これはちょっと、頑固かな？

でも人の話にちゃんと耳を傾けているし……とりあえずの効果はあったかな。

あとはこいつ次第。うまくヴィヴィオと打ち解けてくれるといいんだけど……

それは俺がどうこうする問題じゃねえ。

さて……今から何を食べようかな？

サリエルは少しばかり今からのことを考えて憂鬱になりながら、夜の街を歩いていった。

その後は、夕食を奢って、ティアナにコインパーキングの所まで送ってもらったが……ここでもカードを使う羽目になって、ガチで泣きかけていたのであった。

第四教導 再会と出会い……霸王と聖王。 （後書き）

うーん……思っている展開がどんどんずれていく。

所々オリジナルを入れすぎかな？

まあ、これからはちょこちょこ修正していこう。

今回は、二度目の練習試合をお送りしたいと思います。

第五教導 再戦……想い伝えるために。 （前書き）

作者「今回は何とか日曜日に投稿できたぞ」

サリエル「それが当たり前だ。まったく……まじこいSの体験版に浮かれやがって……」

作者「いや……まじこいSはかなり期待できそうだ！！ 体験版だけでもOPばりのアニメーションが5つも入っているのだからな！！ これが製品版だったら……今から考えるだけでもワクワクしてくる……！！」

サリエル「おい……そんなテンションに大丈夫か？」

作者「大丈夫だ、問題ない」

サリエル「エルシャダイ乙。ま、浮かれるのも無理ないか…… 10月には劇場版マクロスFのBD、12月にはビッグオーのBD BOX、1月にはまじこいSだもんな」

作者「金が減るが、そんなことは些細な事じゃない……！！」

サリエル「キリがない……それでは、どうぞ閲覧してください」

作者「感想、意見、質問はいつでも待っているぜ。燕先輩とマルギツテは俺の嫁……！！」

サリエル「どうでもいい事を口に出すな……！！」

第五教導 再戦……想い伝えるために。

翌日、サリエルはヴィヴィオの朝練に付き合うため、区民公園に来ていた。

夜にヴィヴィオから付き合っただけ欲しいというメールが来たので、こうして来たのだが……

隣にはノーヴェがいる。

「何でサリエルもいるんだ？」

「ヴィヴィオに付き合ってくれて言われたからだよ。お前もそうだろう？」

「おう」

「……ヴィヴィオの奴、落ち込んでいなかったか？」

「あいつはそんなヤワじゃねえよ。昨日の夜から特訓始めているしな」

「バイアリティ溢れることで……」

まあ、ヴィヴィオならそんなもんだろうな。

自分に失礼があると感じれば、一生懸命直そうとするからな。

だから今日俺達を呼んだのも今度は失礼がないように頑張るんだ。

ちよっと待つとヴィヴィオもやってきて、三人はアップがてらランニングをする。

「……アインハルトのこと、ちゃんと説明しなくて悪かった」

「ううん。ノーヴェにも何か考えがあっただんでしょ？」

ランニング中、ノーヴェがヴィヴィオにアインハルトのことを詳しく教えなかったことを謝る。

ヴィヴィオも教えなかった意図を分かっていたみたいで気にしてな

いと笑う。

「あいつさ、お前と同じなんだよ……旧ベルカ王家の王族、「霸王」
イングヴァルトの純血統」

「……そうなんだ」

「あいつも色々迷ってたんだよ。自分の血統とか、王としての記憶とか……でもな、救ってやってくれとかそういうでもねえんだよ。ましてや聖王や霸王がどうこうとかじゃなくて……」

「わかるよ、大丈夫……でも、自分の生まれとか何百年も前の過去のこととかどんな気持ちで過ごしてきたのかとか、伝えあうのって難しいから、思いつきりぶつかってみるだけ……」

シユツとシャドーをして、自分の考えを言葉にする。

そんなしつかりした考えを持つヴィヴィオをサリエルがグシャグシヤと頭を撫でてやる。

「この年で言葉で伝え合うつて言うのは難しいからな……子供はそれで十分だ……」

「ちよ、お兄ちゃん……髪がグシャグシヤになるよ」

「ゴチャゴチャ考えるより、そっちの方が手っ取り早いしな」

「仲良くなれたら教会の庭にも案内したいし」

「あそこか……いいかもな。悪いな、お前には迷惑かけてばかりだよ」

「迷惑なんかじゃないよ!! 友達として信頼してくれるのも、コ
ーチとして私に期待してくれるのも、どっちもすごく嬉しいもん!
! だから頑張る……」

俺を置いてけぼりにされている気がするが、なかなか絵になるので
口出さないでおこう。

しかしまあ……ヴィヴィオは本当に行動力がある。

俺がヴィヴィオぐらいの年の時は……ちょうど兄さんが亡くなる前か。

あの時は自分でも明るい奴で素直に人の話を聞く……今のヴィヴィオみたいな感じた。

しかもフェイド兄さんにべったり……状況的にはそっくりだ。

やれやれ……俺も、兄さんみたいになつてきたのかな？

「おし、決意を言葉にしたところで……特訓、始めるか!!」

「うん!!」

「ノーヴェ、基本的な方針はどうする？」

「そうだな……相手はこっちとは違う流派だ。対策のしようがないから、やっぱり基礎能力の向上、後はカウンターの精度を上げるぐらいかな？」

「俺もそう思う。後前々から思っていたけど、ヴィヴィオはスピードがあるけど攻撃力も防御力もまいちない」

「サリエル……」

ノーヴェがそれはあまり……といった表情を向けて、俺を止めてくる。

しかし、ここら辺で言っておかないと後々修正が効かなくなってくる。今年からD S A Aに出られるし、早い目に対策しておいた方がいい。

「じゃあ、どうすればそれを克服できるの？」

「簡単さ。体の動きを効率のいい物にして、打撃の威力を限りなく口スしないようにすればいいのさ」

「どうやって？」

「今日から技法をお前に教える。この一週間、フィジカルはノーヴェが、俺はテクニクを担当する」

「ま、乗りかかった船だしな……任せておけ」

「はい!!」

「じゃあ、まず……」

ノーヴェから教えることにして、教えている間俺は何を教えるかを真剣に考える。

骨法の亜流を教えるのは……もうちょっと先だな。一旦この勝負が終わってからにして……一番いいのは中国拳法だな。

無限書庫で大量の技術書が置いてあったから、読破したんだよね。

……

後空手の技法も教えないと……

サリエルが何を教えるか迷っている間、ヴィヴィオとノーヴェの特訓は続く。

そうして、それが一段落したところで……

「おし、あたしが教えてやれるのはここまでだな。次はサリエルだ」

「はい!!」

「じゃあ、今回教えるのは……」

近くにあった木に向かって構え、パンと小気味のいい音を立ててパンチする。

ノーヴェとヴィヴィオはその動作に、首を傾げる。

「……ただのパンチじゃねえか？」

「これのどこがテクニクなの？」

「まあ見てな……はっ!!」

サリエルがほんの少し木に向かって押し込むと……ドシンと大きな音を立てて、木が揺れた。

二人の目が点となり、自慢げに拳を戻す。

「第97管理外世界に存在する拳法、中国拳法の寸頸……一番ポピュラーな技だ」

「すごい……」

「すごいけど……私にできるかな？」

「できるようにさせる。後は……ストレートのフォーム改造だな。」

「待て待て、一週間でフォームを変えるのか！？ 無茶にもほどがあるぞ！！」

「そこまで改造する訳じゃない。ちょっと改善するぐらいさ。じゃあ、簡単なフォーム改造から……ヴィヴィオの場合、こうやってパンチを打つことが多いだろ？」

シユツとシャドーでヴィヴィオのフォームを真似てみる。

一見すると、女性格闘技者が打つパンチと同じなのだが……

「そのどこが悪いんだ？」

「いや、悪いってことはないんだ。しなりを効かせる鋭い打ち方は必然的に筋肉量が少ない女性に適したパンチだからな。だけど軽い体の芯に残らないパンチだ。それにヴィヴィオの場合、背負い投げみたいに豪快な打ち方になってるから、見栄えがいいけど必要以上にロスしているんだ。ノーヴェ、パンチの源はどこだ？」

「そりゃ、広背筋だろ。後は三角筋と上腕三頭筋だな」

「そうだ。今回教えるフォームは……」

グツと脇を締めて、再度シャドーする。

先ほどより鋭く、筋肉の力が乗っているように感じられた。

「こうやって脇を締めることで、背中の筋肉を引っ張る。これだけで一直線にねじり込めるパンチができるって訳だ。この矯正だけで精度とパワーが二倍になると考えていい。試しに打ってみる」

「えっと……こうやって！！」

パシンとサリエルに打ち込むが……音がまだまだ軽い。

「そのまま押し込んでみる」

「んっ……ダメだよ」

「脇をもつと締めて！！ もう一度やってみる」

「はっ、はい！！」

再度フォームを確かめて、打ち込んでみると……

ビシッといい音を立ててサリエルの手に打ち込まれた。

ヴィヴィオは以前の自分のパンチとは違う感触に戸惑いながらも感激に震える。

打たれた手のひらをひらひらとさせて、サリエルが不適に笑う。

「おゝいてえ……な、全然違うだろ？」

「確かに……ヴィヴィオにしては重そうなぱんちだったな」

「これだけのことでこんなに違うなんて……」

「後は腰のキレも重要だ。腰をうまく回転させて、そのまま乗せることができれば威力とスピードが跳ね上がる」

サリエルが見本を見せるかのようにシャドーをする。

流れるような動作の中に、確実に丁寧に先ほど言ったフォームを実戦していく。

腰のキレを意識して、打ち込む際に脇を締める。ヒュッと風切り音がするほど鋭いパンチが打ち出される。

ノーヴェもヴィヴィオもそれに見入った。

一通り流したところで、止める。

「これができるようになれば、自然とパンチがよくなるはずだ。しっかり覚えような」

「うんっ!」

すぐさまヴィヴィオはフォームを確かめるようにシャドーを繰り返す。

その様子をサリエルとノーヴェが見守る。

「……やっぱすげえな、教導官って」

「そんなことないさ。ノーヴェの方がすごいって。ここまでヴィヴィオの基礎を作ってくれたのだから……」

「あ、あたしはちよつと稽古を見てやつただけだぜ!」

「謙遜するな。それでも立派なことだ」

「……へへっ、照れるぜ」

鼻の頭を掻いて、ガラになく照れるノーヴェ。

そんな様子に柔らかい笑みを浮かべて、サリエルは柵に腰掛ける。

「……武術には「先に開展を求め、後に緊湊に至る」という言葉がある」

「なんだ、それは？」

「最初は威力と正しい動作を重視し、その基礎を身に着けてから実戦的な命中精度や動作を重視するという事だ。だけど俺は、自分が教えられる間に少しでも多くのことをヴィヴィオに伝えたいって思っている」

「教えられる間って……サリエルはまだまだ現役じゃねえか？ ピークもこれからだろうし……」

「いや、十代に無茶すぎたせいだな……体はすでにボロボロなんだ。技術的なことはまだまだ伸びていくだろうけど、体力とかはな……」

「……初耳だぞ、それ」

「シャマル先生からあんまり言わないようにって釘刺されているか

らな。まだフェイトとなのはさんにしか言っていないことだ」

右手を撫でて、両膝も労るように撫でる。

六課解散後もシャル先生による定期検診は続いている。

右手は二度ほど骨折している。完璧に治ったのが奇跡と言われ、次複雑に骨折したら復帰できないと宣告されている。

膝も同様だ。ちゃんと治ったとはいえ、爆弾を抱えているのに等しい状態だ。そのためフォトン・ステップの多用は極力止めるようにと言われた。

こんなボロボロなのだ、サリエルの体は……十代の時にあまりにも多くの出来事に巻き込まれすぎたのだ。

普通の人が入られる幸せを犠牲にして管理局に入ったら……この様だ。

長くて20年、早くて半年後には現役を引退して後方職へ移らなければならぬ。

「……無茶だけはするなよ。姉貴とか……ディエチ達が悲しむから」

「大丈夫だ。よほど大きな事件が起きない限り、無茶はしない」

「絶対だぞ」

「ああ……よし、ヴィヴィオ。それは毎日のシャドーでやることにして次は寸頸を教えるぞ」

「うん!!」

柵を降りて、次の技術を教え始めるサリエルの背中を見て、ノーヴエは一抹の不安を覚える。

確かにサリエルは強い。あのドミニ姉も認めるほどに……

しかし、その強さ故に頼まれる事件も厄介な物が多い。

よほどのこと……それは元六課のメンバーが招集されるほどの出来事だろうけど……

その強さが壊れるのは……やはり悲しい。

少しでも現役でやってもらうには周りの協力も必要だ。
あたしも……少しいいから力になろう。
そう決意して、ノーヴェもサリエルの指導の仕方を盗むために近くに寄っていった。

そして、一週間後……アラル港湾埠頭PM13:20 廃棄倉庫区画
試合時間10分前にヴィヴィオは待っていた。

この一週間毎日ノーヴェが……時間を許す限りお兄ちゃんも練習に付き合ってくれたんだ。

今回の再戦で私の気持ちをしっかりとアインハルトさんに伝えないと……顔向けできない。

周りではこの前いたメンバーが野次馬で集まり、アインハルトの登場を今かと待っている。

ちなみにサリエルは仕事で来ていない。

「お待たせしました……アインハルト・ストラトス、参りました」
「来ていただいてありがとうございます、アインハルトさん」

スバルとティアナと一緒に来たアインハルトに礼をする。

来てくれた……これで私の気持ちを伝えられる。

精一杯頑張ろう!!

「ここな……救助隊の訓練でも使わせてもらっている場所なんだ。廃倉庫だし、許可も取ってあるから安心して全力出していいいぞ」

「うん。最初から全力で行きます!! セイクリッド・ハート、セツト・アップ!!」

すぐさま大人モードで臨戦態勢に入るヴィヴィオ。

アインハルトもそれに呼応して……

「……武装形態」

自らも多少成長した大人の姿をとる。

両者にピリピリとした緊張の空気が流れる。

「今回も魔法は無し of 格闘オンリー五分間一本勝負。それじゃあ、試合……開始ッ……！」

間合いをそのままに試合が開始した。

ヴィヴィオは教わったとおりの構えを取り、相手の出方を見る。

アインハルトはまだ構えずに一度ヴィヴィオの構えをじっくりと見る。

（……この前と威圧感が違う。この一週間でここまで鍛え込んでいるなんて……）

おそらくあのサリエルさんが直に指導したのだらう。それならば、この構えが納得できる。

しかし……見れば見るほど綺麗な構え。油断も甘えもない。サリエルさんと比べるならあの人はむき出しの武、ヴィヴィオさんは磨かれた武だ。

いい師匠や仲間に出まれて、この子はきっと格闘技を楽しんでいる。私とはきっと何もかもが違うし、私の一拳（痛み）を向けていい相手じゃない。

ここでもうやくアインハルトも構えを取る。ゆったりとした余裕の構え……

ヴィヴィオは多少気後れを取るが、グツと足を踏みしめて堪える。すごい威圧感……一体どれくらい、どんな風に鍛えてきたんだらう。

勝てるなんて思わない。だけど……だからこそ、一撃ずつで伝えなきゃ……

ここでヴィヴィオが動き出した。アインハルトもそれに合わせて、動き出す。

（この間はごめんなさいってー！）

先制はアインハルト。真っ直ぐに打ち込まれたストレートを両腕をクロスさせて、しっかりガードする。

その衝撃でガードが若干ゆるむ。アインハルトは返す刀で左を繰り出す。

頬にかすりながらも何とかかわし、続けざまに襲ってくる右ストレートをいなす。

ここまでは防戦一方……ヴィヴィオは左フックをダッキングしてかわし、そのわずかな隙を狙って教えてもらった技を繰り出す。

（私の全力ー！！）

脇を締めて、最短距離でパンチを走らせる。カウンターで繰り出されたそれはアインハルトのから空きの胴体に見事に突き刺さった。その威力で後ずさりを余儀なくされたアインハルトは驚く。

この前やったときとは雲泥の差。あまりにも威力が違いすぎる。

ヴィヴィオも休む暇を与えない。続けざまに拳を突き出して、アインハルトの前で止める。

その行動に一瞬呆気を取られてしまった次の瞬間、アインハルトは宙へ吹き飛んだ。

サリエルは書類を片付けながら、時計をちらりと見る。

すでに一時半を過ぎている。

（ヴィヴィオの奴……今頃やっているだろうな）

一週間でできる限りのことを教えてやった。

フォームも大分改善されたし、寸頸も威力が出るところまで教えられた。

後はヴィヴィオ次第なんだけど……

「サリエル、お嬢の再試合……今日なんだろう？」

「……誰から聞いた？」

「デイエチからメールが来ました。それでお嬢様に勝ち目はあるのですか？」

「相手が悪すぎる。よくて善戦、悪くて一分で轟沈だろうな」

あんまりにもきつぱりと告げるサリエルに二人はため息をつく。

こと武術関係に関してはサリエルは相手の心を折るくらいすっぱりと物を言う。

武術に嘘をついたところで死ぬのは自分という考えから来ているらしいが……もう少しオブライトに言えないのだろうか？

「まあお互いの実力も相当あるし、今回の再試合はヴィヴィオにとってもアインハルトにとってもいい経験になるだろう」

「先ほどは勝てないと言っていたのに……」

「違う違う、精神的につてことだよ。二人の境遇は対極とっていいほど違う。俺たちに優しく教えられてきたヴィヴィオが陽、一人孤高に稽古を重ねてきたアインハルトが陰だ。そこから学びとれるものは非常に多い」

「なるほど……」

「あわよくばお互いを高め合う好敵手になってくれたらいいのだが

……」

実際の所、あの二人は絶対に通じ合うだろう。

真剣に拳を交えたら、お互いの気持ちが拳を通じて分かる。

アインハルトは聡い子だ。ヴィヴィオの深層にある気持ちを知れば、あの考えも変わるはず。

そして……好敵手同士になれば、ヴィヴィオ達の歳だったら天井知らずに実力が伸ばし合えるだろう。

「好敵手を作るだけならば、お前の愛弟子をぶつければいいのではないか？」

「あれはD S A A用にとっておくのさ。そうした方が面白いし、いい勝負ができそうだ」

「そうですか……それより、言わなくていいのですか？」

「何を？」

「お嬢様の戦い方です。今のポジションで戦っていけば、いずれ壁に突き当たるってサリエルも分かっているのでは？」

「……分かっている。ヴィヴィオはフロントアタッカーにしては攻撃力も防御力もいまいち物足りない。かと言ってスピードだけで戦えるほど甘いポジションでもない。求められるのは生存力と最前線の激しい攻撃を耐えられる強固な防御力だからな」

「じゃあなぜ言わないんだ？」

「俺はヴィヴィオの好きにさせたいと思っている。努力して努力して……それでも壁にぶち当たり、分岐点に立つ。その時に選択するのはヴィヴィオだ。俺はその背中を押してやることしかできない……その時選んだ道に後悔しなかったら、俺はそれでいいと思っている……いいじゃねえか、攻撃も防御もなくてスピードで頑張るフロントアタッカーがいても……」

かつて、サリエルも六課でフリーアタッカーをする前はフロントア

タツカーだった。

スバルみたいなタイプでないとフロントアタッカーは大成しないと
言われている事は前線に出る輩の常識だ。

しかし、過去例外はいくつも存在する。

サリエルにしろ、攻撃とスピードがあつたからこそフロントアタッ
カーという激務をこなすことができたのだ。

ヴィヴィオも……分岐点に立つまでに自分の中で確固たる技術を培
つて欲しい。

今のままではウィングバック、よくてセンターガードが待っている。

「さ、無駄話してないで仕事片付けるぞ。明日からはまた教導な
んだから」

「そうだな。セツテ、その書類を……」

三人はヴィヴィオの試合結果を楽しみにしながら、仕事をこなして
いった。

ヴィヴィオの攻撃を続く。

吹き飛ばされたアインハルトは辛くも体勢を立て直すが、ダメージ
が足に来ているのか若干ふらつく。

さっきの攻撃は一体……？

手を寸前で止められて……その後にもすごい衝撃が腹部を襲った
のは分かるけど……

どういう原理なのかがまったくわからない。

しかし、驚いている暇も考えている暇もない。

今は目の前の相手に集中しないと――！

ヴィヴィオの鋭い連打の合間を縫って、勢いを止めるローキックを
入れる。受けてしまったヴィヴィオの勢いが一瞬で止まる。

止まったのを見て、アインハルトは攻勢に出る。右、左とテンポよく繰り出し、ガードの隙間を縫って顔面に拳を叩き込む。負けじとヴィヴィオも反撃するが、相手の方が一枚上手なのかリズムよくパンチを打たせてくれない。その間にアインハルトは確実にダメージを与えていく。

「~~~~ツ!？」

実力の差に歯がみする。やはり一週間程度の特訓では付け焼き刃に過ぎなかった。

だけど、アインハルトさんもこんなに頑張っているんだ。私だって……諦めない!! まだ伝えたいことだってたくさんあるんだ!!

鋭い右ストレートを間一髪で避けて、合わせるように自身の最高のフォームで右ストレートをクロスカウンター気味に入れる。霸王が……先ほどよりひどくぐらついた。

「やったっ!!」

周りから歓声上がるが、アインハルトは倒れない。ヴィヴィオも声を上げて再度攻勢に出る。

両者、バリアジャケットを削りながらお互いに一步も引かない。しかし……悲しいかな。実力に劣るヴィヴィオが徐々に押され出した。

だが、ヴィヴィオも諦めない。ダメージを受けながらも必死に攻撃を繰り出す。

その姿にアインハルトは一つの疑問が浮かんだ。

(この子は……この子はどうしてこんなに一生懸命に?)

師匠が組んだ試合だから？ 友達が見ているから？

防御の上から叩き込みながらこんな頑張る意味を考える。

一方ヴィヴィオもある思いが胸の中によぎっていた。

（大好きで大切に……守りたい人がいる。小さな私に強さと勇気を教えてくれた。世界中の誰よりも幸せにしてくれた）

なのはとフェイト……ヴィヴィオにとってはかけがえのない、大切な母^{ひと}。

幸せにしてくれると同時に、強さと勇気の大切さを教えてくれた。

そしてサリエル……ヴィヴィオがわがままを言っても、嫌な顔一つもせずに付き合ってくれたり、時には厳しく接してくれた大切な兄代わり。

その背中がどんなにも頼もしくて……壊れる怖さを知っていて……

だから、この三人を守るために……強くなるって約束した。

「ああああっ！！」

強くなるんだ！！どこまでも！！

この試合最高のストレートがアインハルトの防御を打ち砕こうとしたが……

冷静に打点をずらして、スタンスを広く取る。そこから繰り出されるのは……

「霸王断空拳！！」

ヴィヴィオも何とか対応しようとショートアッパーを繰り出すがすでに遅し。

ストレートで撃ち出された霸王断空拳はヴィヴィオの胴体に突き刺さった。

吹き飛ばされて、倉庫にぶつかる。そこから立ち上がってくる気配はない。

試合を見守っていたノーヴェはヴィヴィオが戦闘不能と判断し……

「一本！！　そこまで」

アインハルトの勝利が宣告された。勝者のアインハルトは荒い息を吐いて、構えを解いた。

吹き飛ばされたヴィヴィオを心配してコロナ達がそばに駆け寄る。自分の拳を見て、アインハルトは先ほどの戦いを思い返す。

……紙一重だった。下手したら私が負けていた。

それに……ヴィヴィオさんの気持ちはしっかりと伝わってきた。ちゃんと……謝らないと。

オットーとデードに介抱されているヴィヴィオは、きゅっ……と目を回している。

まだ気絶しているようだ。近くに駆け寄って、状態をしっかりと見る。

「……怪我はないようです。大丈夫」

「アインハルトが気をつけてくれていたんだよね。防護^{フイールド}抜けないように」

「ありがとッス、アインハルト」

「ありがとございます」

「ああ、いえ……私はっ」

そんなことはないと弁解しようとしたら、足下がふらつきそのままティアナの方に倒れてしまう。

立とうにも膝が笑って言うことを聞かない。

「あらら」

「ラストのショートアッパーが顎にかすっていたんだな。時間差で

効いてきたか？」

「だ、大丈夫……大丈夫ですから」

何とか自分で立つが、すぐさま足下がおぼつかなくなりスバルに倒れてしまう。

「いいからじつとしている」

「そのまま……ね？」

「……はい」

「それで聞きたいことがあるんだ。断空拳はさっきのが本式か？」

「……足先から練り上げた力を拳足から打ち出す技法そのものが「断空」です。私はまだ拳での直打と打ち下ろしでしか撃てませんが

……」

「そうか……で、ヴィヴィオはどうだった？」

「……」

この戦いを通じて、自分がどんなに間違った味方をしているか思い知らされた。

ヴィヴィオさんは、自分で誓った事のために格闘技をしている。

それもその誓い事がとても純粹で……一人でやり遂げるのは難しい物だ。

私みたいにああだこうだと悩まず、ただひたすら強くなろうとしていた。

だから……

「彼女には謝らないといけません。先週は失礼な事を言ってしまいました……訂正します、と」

「そうしてやってくれ。きっと喜ぶ」

……彼女は霸王^{わたし}が会いたかった聖王女じゃない。

「ただ私は……この子とまた戦えたらと思っている。」

「まだ気絶しているヴィヴィオの手を握って、改めて自己紹介をする。」

「初めまして……ヴィヴィオさん。アインハルト・ストラトスです」

「それ、起きているときに言ってやれよ」

「……恥ずかしいので嫌です。どこかゆっくり休める場所に運んであげましょう。私が背負います」

「「はい」」

「じゃあ、私はサリエルに連絡を入れておくね」

「ああ、頼んだ。ディエチ」

こうして、二人の再試合が終わった。結果はヴィヴィオの負けであったが、その代わりに新たな友情が芽生えた。

アインハルトとヴィヴィオ、この二人の出会いがこれからどんな運命を作り出すかは誰にも分からない。

みんな、ゆっくり休める場所を探すためにワイワイと動き出す。

アインハルトもヴィヴィオを背負い、廃倉庫を後にするのであった

……

「そうか、負けたか……ま、ヴィヴィオにとっていい経験になるだろう」

夕方に仕事が終わわり、ヘリオンに寄りかかってディエチからの通信に相槌を打つ。

結果はやはり予想通り。ヴィヴィオが負けた。

しかし、送ってきた映像を見る限りいい勝負をしている。寸頸も一発だが決まっているし、教えたフォームをしっかりと守ってストリートを打っている。

ここから伸びていくだろう…… ヴィヴィオの成長が一層楽しみになってきた。

「それで、アインハルトはどうした？」

「さっきまで私達といたよ。もう帰っちゃったけど……」

「ヴィヴィオとの関係は？」

「……仲良くなれそうだよ。これで肩の荷が下りそう？」

「むしろ重くなったね。教える人数が増えて大変だ」

ヴィヴィオを筆頭にコロナちゃんにリオちゃん、それにアインハルトも加われば教える方としては結構な負担になる。

すでにヴィヴィオ達には内緒の教え子も一人抱えているっていうのに…… 大変だ。

その所はノーヴェとうまく分担してくしかないな。

「サリエルはお弟子さんも抱えているからね…… でも、楽しみですよ？」

「どうだが…… 映像悪かったな？」

「ううん。これぐらいならお安いご用だよ」

「ありがとうな。それじゃ、おやすみ」

「おやすみ」

通信を切りながらポケットからタバコを取り出し、一口吸う。

好敵手ができましたか…… そいつは結構。

ならば、後はもっと決定的な敗北を知ってもらおう事だな。

DSA A予選開始まであと三ヶ月…… ちょっと鍛え込んでやろうかと、コンソールを操作してあるところに通信を繋ぐ。

「はい…… どうしましたか、先生？」

「久しぶりに稽古をつけてやる。今日の7時に区民公園な」

「わぁ……分りました！！ 万全のコンディションで待ってますね！！」

ヴィヴィオ達も知らない自分の教え子……正確に言えば、一番弟子が目を輝かせて承諾した。

まだまだ子供……しかし、それ故に吸収も早い。才能だけで言えば俺を遙かに超えている。

これが俺の歳になれば……格闘技者なら絶対王者、管理局員ならエースオブエースは堅い。

それには今からしっかり育てていかないと……指導者のエゴを押しつける指導ではなく、自身の経験をしっかりと受け継がせられる指導をしなくては。

カートリッジに残っている香料を全て吸い出すかのように吸い、盛大に水蒸気を吐いてヘリオンのエンジンをかける。

今日はどのように稽古をつけてやるかを考えながら帰路についた。

新暦79年春。

高町ヴィヴィオ、サリエル・フォーゼオンとアインハルト・ストラトスはこうして出会った。

これが彼女たちの鮮烈な物語の……始まりの始まり。

第五教導 再戦……想い伝えるために。 （後書き）

ふう……とりあえず一巻の部分は全て書き終えたつと。

次回からはついに合宿旅行編へ突入。

サリエルの戦闘がついに解禁！！ これを見逃すわけにはいかない。

それでは次回に期待しろ！！

第六教導 出発……合宿旅行！！（前書き）

作者「二週間も待たせてしまって、本当にすみません！！」

サリエル「……早速言い訳を聞こうじゃないか？」

作者「1 大学のゼミが凄まじく忙しかった。2 その余波で睡眠時間が激減。絞り出すために執筆時間の削減。3 ベルセルクを読みながら書いていたため、さらにスピードダウン」

サリエル「1、2は納得しよう……しかし、3の言い訳は許し難い」

作者「それに……どうやって話を進めていくかでも迷った」

サリエル「よし、お前死刑な（シャキン）」

作者「やれやれ……これだから最近の若者は……」

サリエル「グダグダ言わずにさっさと書け！！ ハドウン・ブレイカー……！！」

作者「によわあああああつ！？（バタツ）」

サリエル「これから何とか一週間以内に仕上げられるように頑張らせる。それではどうぞ閲覧してください」

作者「感想、質問、意見はいつでも待っています……す（ガクッ）」

第六教導 出発……合宿旅行！！

ヴィヴィオとアインハルトとの試合から一週間……

それほど変わったことはなく、日は進んでいった。

普通の日常の繰り返し……それがどんなに心地いいか。

今日も……

「ハッ……ハッ……ハッ……ゴール！！」

「ふう……よし、これで朝練は終わり。学校へ行く準備しな」

「ありがとうございます」

ヴィヴィオとサリエルは朝練に出かけていた。

試合以降ヴィヴィオの気合の入りは全然違う。

アインハルトという好敵手を得たからであろう。

教える側の俺としては嬉しい限りなので、すこし力を入れて稽古をつけている。

どう成長していくかが……本当に楽しみだ。

さて、来週には合宿旅行もあるし気合い入れて仕事するか。

サリエルが一人気合いを入れてしばらくすると……今度はなのはとヴィヴィオと一緒に家を出るようだ。

「そういえばヴィヴィオ、新しいお友達アインハルトさんだっけ？

ママにも紹介してよ」

「ん……お友達っていうか、先輩だからね……もっとお話ししたいんだけど、なかなか難しくくて」

また今度会わせると約束してヴィヴィオが学校へ走っていく。

校舎に入ると、見慣れた背中が見えた。

「あつ、アインハルトさん!!」
「はい」

St・ヒルデ魔法学院中等部一年生、アインハルト・ストラトスが
ヴィヴィオの呼びかけに振り向いた。

アインハルトさんは実力のある格闘技者で真正古流ベルカの格闘武
術、^{カイザーアーツ}霸王流の後継者。

それに加え、ベルカ諸王時代の王「霸王」イングヴァルトの正統な
子孫。

私もこの間試合をさせてもらっただけど、全く敵わなくて……

しかし、できれば今より仲良くなって、一緒に練習したり、お話し
たりしたんだけど……

雑談をかわしながら、そんなことを考えていると自分の入る校舎を
過ぎてしまった。

「ヴィヴィオさん、あなたの校舎はあちらでは？」

「あつ!!? そうでした!!」

「……それでは」

「あ……ありがとうございます、アインハルトさん」

だけど、なかなかうまくいかなかったり。

それでも……

「……遅刻はしないように。気をつけてくださいね」

「はいっ!! 気をつけますっ!!」

何気ない一言が嬉しかったり。

そんな一喜一憂の日々だけど……

今はもうなくなってしまった旧ベルカの出身者同士、「強くなりた
い」格闘技者同士……

触れ合えるときはきつとあるから。

そんなことを考えながら廊下を歩いていると、ある男の子が目についた。

「あつ……ユウ君……！」

「ヴィヴィオ」

「久しぶり……！！ どうして始業式の時はいなかったの？」

「親の都合でずっと本局に泊まってたんだ。今日からもう大丈夫だから」

「そうなんだ。教室行こ……話したいことたくさんあるんだ……！」
「うん」

ヴィヴィオに引つ張られていく男の子……睦月ユウはそんな元気なヴィヴィオにされるがまだだった。

彼はヴィヴィオが入学したときからの友達で、幼なじみ。家も結構近いので時々ヴィヴィオの自主練に付き合っている仲だ。

教室に入り、先にいたりオとコロナの所にユウと一緒に行く。

今は中等部も初等部も前期試験の真っ最中だ。周りは教科書などを開けて、最後の追い込みと必死に勉強している。

ヴィヴィオ達も例外ではない。

「っていうか……今日も試験だよ……！！ 大変だよ……！！」

「そうなんだよね…… ユウ君は大丈夫なの？」

「俺は一応勉強しているから……それに先生達も事情を知っているからある程度見込み点が……」

「ずる……い……！ なんてユウ君だけ……」

「コロナ、ユウ君は事情があるからいいの。それよりも試験が終われば、土日とあわせて四日間の試験休み……！」

「うん……！ 楽しい旅行が待ってるよ……」

「宿泊先も遊び場ももう準備万端だって……！」

「「おおっ!!」」

三人がはしゃぐ中、ユウだけがキョトンと状況を把握しかねている。それに気づいたヴィヴィオは説明をし始める。

「あつ、そつか。ユウ君は知らなかったね。今度の試験休みを利用して、旅行行くんだ!!」

「へえ……よかったね、ヴィヴィオ」

「もしよかったら、ユウ君も行かない？ 人数は多ければ多いほど楽しいから!!」

「一度親に聞いてみるよ。ウチってこういう事は結構厳しいから」

「そつかぁ……一緒にに行けるといいね」

「うん」

「よし、じゃあ楽しい試験休みを迎えるためにっ!!」

「目指せ、平均点!!」

「コロナ……そこは100点満点でしょ？」

「あつ、そつか。じゃあ改めて……目指せ、100点満点!!」

「「「オー!!」」」

四人が気合いを入れて、勉強に励む。

その中でユウはちよつとウキウキした気持ちが湧いてきた。友達と旅行か……初めてだからちよつと嬉しいかな。

多分父さんも母さんも許してくれるだろうし……それに……

格闘技者の羨望の的、ヴィヴィオのお兄さんであるサリエル・フォーゼオンに直に会えるのだ。

このチャンスを逃す手はない。

反対されても……絶対行つてやる!!

ユウがそう決意している時、高町家では……

「エリオ、キャロ、そっちはどう？」

「予定通り週末からお休みです!!」

「そう、よかった!! サリエルも今休暇を調整するために教導頑張っているんだ」

「お兄ちゃんらしいですね。久しぶりに会うから楽しみです」

「みんな、予定通りにいけそうだね。春の大自然旅行ツアー&ルーテシアも一緒にみんなでオフトレーニング!!」

なのは達がエリオ達と話している時、ナカジマ家では……

「みんなで旅行あたしも行きたかったツスッ!!」

ウエンディが駄々をこねていた。

しかし、一緒にいるチンク、ノーヴェ、デイエチは慣れっこなのかその様子に口を出そうとせずおやつを食べている。

「ノーヴェとスバルだけってズルいッスッ!!」

「あゝうるせえな……あたしらだって別に遊びに行くわけじゃねえ

!! スバルはオフ取れだし、あたしはチビ達の引率だ」

「とか言って……通販で水着とか川遊びセットを買ってるのをお姉ちゃんが知らないっても?」

デイエチがどこからともなく、通販の箱を取り出して見せびらかす。誰も知らないはずの物が姉の手にあった事を知ったノーヴェは、顔を真っ赤にして箱をひったくる。

「お前!? 人の物勝手にっ!」

「いや……発送データに中身書いてあるし……まあ、いいじゃない。

ノーヴェはバイトも救助隊の研修も頑張ってるんだし」

「全くだ」

「だから……遊びじゃねっって」

「そういえば、あの子……アインハルトも一緒か？」
「そのつもり。これから誘うんだけどね」

すぐにアインハルトに通信を繋ぎ、旅行の説明をしていく。

「合宿……ですか？ すみませんが私は練習がありますので……」
「だから、その練習のために行くんだって。あたしや姉貴もいるし、ヴィヴィオも来る。練習相手には事欠かねえ。しかも魔導師ランクA A - からオーバースのトレーニングも見られる」
「はい……」

そのことを聞いて、アインハルトは少し心が躍る。
私の実力の遙か上にいる強者達のトレーニング……是非とも知りたい。

何をやってたらあそこまで強くなれるか……いつも不思議でたまらなかった。

特にサリエルに関しては……

「ついでに歴史に詳しくて、お前の祖国のレアな伝記本とか持っているお嬢もいる。まあ、たった四日だ。騙されたと思って来てみるって。つまんなかったら、走り込んだり一人で練習するなりしてていいんだし……」

「あの……」

「いいから来い！！ 絶対いい経験になる！！ 後で詳しいことメルすつから、とりあえず今日の試験頑張れな」

「……はい」

強引に押し切られたアインハルトは、旅行に同行することを承諾してしまった。

その様子には三人は柔らかい笑みを浮かべる。

「ノーヴェのああいう強引さって、つくづくスバルと姉妹だよねえ」
「ああ……そうだな」

「うう、あたしも行きたかったツス……」

それとは別に我らが主人公サリエルはというと……

「よし、今日はこれで終了だ。各自ストレッチして上げれ!!」

ミッドチルダ北部の警備隊へ教導に来ていた。

どっぴり日が暮れるまで訓練をつづけ、ようやく終了を告げる。隊員達から一斉にため息をつく音が木霊してくる。

自身も大分体を酷使したので、隊員の輪に交ざってストレッチをする。

こういう場でのコミュニケーションも大切である。自然と隊員の本音が聞けたり、性格が分かったりして後の教導がやりやすくなるからだ。

会話しながらしっかりストレッチをして、今日の疲れを残さないようにする。

徐々に隊員の数が減り、ついにサリエルだけが残った。

いまだにストレッチを続けて、訓練場の片付けに取り掛かる。

「ああ、それは私がやっておこう。練習もかねてな」

「悪いな」

「それで、来週は休むのか？」

「ああ。ヴィヴィオ達とオフトレ……いつもこの時期にやってるかな。体力の限界まで追い込むつもりだ」

「そうか……私達は同行できないのか？」

「無理だな。まだ入って一ヶ月しか経ってないんだぞ？ 有休は出ないし、そんなに休みも取れない。実地を兼ねた軽い教導を入れて

おいたから安心しろ」

「……鬼」

「セツテ、そう言っな……」

いつの間にか後ろに立っていたセツテのつぶやきに少ばかり遺憾を覚える。

俺だってお前達の事を思ってたな……

そう言おうとしたとき、思わぬ人物から通信が来た。

「サリエル、今大丈夫ですか？」

「ウーノ、珍しいな……お前から通信をかけてくるなんて」

「春の旅行に行くと言いましたので、グラディアスとヘルメスの整備をと思ひまして……」

「いや、帰ってからでいいよ。酷使はするだろうから、しっかり頼むよ」

実際去年の春旅行では、行った後グラディアス達を見てもらったら六課時代の疲労が蓄積されていた。

間違いなく今回も激しい物になるので行く前に整備してもすぐに疲労するのは目に見えている。

「……分かりました。楽しんできてくださいね」

「ありがとうな。用はそれだけか？」

「ええ。それでは」

薄く笑いかけられながら、通信が切れた。

その表情を見たサリエルの顔に不安が張り付く。

あの笑い方は何か企んでいる時の物だ……一体何を考えているんだ？
ウーノとの関係は至極良好で、最近喧嘩した記憶もない。

仮に喧嘩しても仕返すような性格でもないし……

思い当たる理由もなく、サリエルは考えるのを止めた。こう言うときはドンと構えていればいい。

トーレ達がちょうど訓練場の片付けも終わり、自身のストレッチも切り上げて滞在先の宿舎にトーレ達と戻っていった。

そんな日常が続き、ヴィヴィオ達の試験期間も無事終了。

三人はなのはの家に集まって、自分達の試験結果を見せていた。

「はい。試験お疲れ様」

「みんな、どうだった？」

「花丸評価を頂きました！！」

「三人揃って」

「優等生です！！」

バツと成績表を広げ、自分達のできばえを見せる。

三人とも平均点を遙かに超えていて、コロナに至ってはオール満点と非常に優秀だ。

その成績にフェイトとなのはも満足げに笑う。

「みんなすごいすごい！！」

「これならもう堂々とお出かけできるね！！」

「じゃ、リオちゃんとコロナちゃんは一旦お家に戻って準備しないとね」

「はい」

「お家の方にもご挨拶したいから、車出すね」

「あつ、じゃあ準備済ませて私も行く！！」

「あゝ……ヴィヴィオは待ってて。お客様が来るから」
「お客様？」

『It seems to have come.』

ベルの音が鳴り、玄関に駆け寄ってみると……

「こんにちは」

アインハルトとノーヴェが準備万端の状態で来た。さすがのヴィヴィオも予想はしていなかったのか、眼をキラキラさせて感激する。

テンションも上がりまくり。ブンブン握った手を振り回すほどである。

「ほら、ヴィヴィオ。上がってもらって」

「あ、うん！！ アインハルトさん、どうぞ！！」

「お邪魔します」

恥ずかしさで多少顔を赤く染めながら、アインハルトを中へと案内する。

その後ろではフェイトとノーヴェがこそこそと話している。

「あの子が同行するって教えなかったのが正解だね、ノーヴェ」
「はい。予想以上に……」

中に入り、アインハルトはリオ達と挨拶を交わしていく。そして、今回初めてなのはと顔を合わせる。

「初めまして……アインハルトちゃん。ヴィヴィオの母です。娘がいつもお世話になっています」

「いえ……あの、こちらこそ」

「格闘技強いんだよね？　すごいねえ！！」

「は、はい……」

ぐいぐいと聞き込んでくるのはにたじたじのアインハルト。

その間をヴィヴィオが割って入る。

「ちょ、ママ!! アインハルトさん、物静かな方だから!!」

「え〜?」

「さて……ここから出発するメンバーは……」

「ユウ君がまた来ていないよ?」

「ああ、ユウ君は空港に直接来るって、さっき連絡があつたよ」

「そっか。なら、全員かな?」

「じゃあ、途中で二人の家に寄ってそのまま出かけちゃおうか?」

「……はぁい」

元気よく返事をして、ヴィヴィオは慌ただしく着替えを始める。
今回の春旅行……相当賑やかになりそうだ。

いつものメンバーに加え、アインハルト、睦月ユウがいる。

これで盛り上がらないわけがない。

「賑やかになりそうですね」

「ああ。」

「そういえば、スバルさん達は別行動なんですか?」

「スバルとは次元港で待ち合わせ。ちょうど仕事を終えている頃じゃねーかな?」

「そうなんですか……あつ、サリエルさんは?」

「あいつも昨日まで泊まりで仕事だったからな。直接現地に向かうって」

ノーヴェが各々の事情を話している時、サリエルは本局の公共通信所で班長に教導完了の報告をしていた。

「とりあえず仕上がりは先方も満足していました。今回の報告は以上です」

「ん、ご苦労だったな。今から旅行だろ？」

「はい、二日間留守にします。トーレとセツテを置いていきますのでこき使ってあげてください」

「実地を兼ねた教導入れやがって……俺がついて行ってやるよ」

「お気遣いありがとうございます」

「んじゃ、楽しんでこいや」

班長からのお墨付きも出て、ようやく胸をなでおろす。

さて……今から送ってもらうか。

サリエルは無限書庫に向かい、ユーノに会いに行く。

知り合いで転送魔法が使えるのはユーノだけであり、加えて久しぶりに会えるので少しばかりテンションが上がる。

「スクライア司書長、いますか？」

「ああ、いるよ。中にどうぞ」

「失礼します。お久しぶりです、ユーノさん」

「サリエル君！？」

いきなりの訪問に驚くユーノ。

書類から手を離して歩み寄り、がっちりと握手を交わす。

「三ヶ月ぶりぐらいかな……元気にしていた？」

「はい、それはもう……フェイトも元気にしていますよ」

「それは良かった。で、今日は何の用かな？」

「ちょっと転送してもらいたいですけど……いいですか？」

「うーん……今は大丈夫かな？ いいよ、送ってあげる」

「ありがとうございます」

「それじゃ、転送ポートに向かおうか？ 次元世界を渡るとなるとポートを介してじゃないと……」

仕事があるだろうに、自分の私事に付き合ってくれるユーノさんに感謝。

昨日の夜に教導が完了し、本局の方に用があつたのでそのまま泊る形になってしまった。

結局空港に行くことを断念して、直接転送してもらおうと考えてた。

「ユーノさん、なのはさんとはどうなんですか？ そろそろ一年ですよね？」

「うーん…… ヴィヴィオがいるから会えてはいるんだけど…… なかなか君たちみたいにはなりそうにないよ」

ユーノとなのはは一年前、サリエル達の結婚式に付き合い始めた。男のけじめと言って、ユーノさんが俺に相談してきたことは今でも覚えている。

しかし、なのはさんは筋金入りのワーカーホリック。ヴィヴィオが小学校に入ってからマシになったが、それでもまだまだ仕事が恋人状態だ。

その中で告白したのだが…… 結果は付き合つこととなった。だが、それはただ単に今の関係がそのまま恋人関係に変わっただけで、生活まで変わるわけではなかった。

聞いた限りではキスとかはするみたいだが…… その先には進めないようだ。

「たまにはグワツて行かないとなのはさんみたいなタイプはずっとそのままですよ？」

「行きたいんだけど…… 嫌われたらって思うとね」

「男が好きな人を求めて何が悪いんですか？ それぐらいで嫌われるようでしたら、それまでの愛だったってことですよ」

「そういうものなのかな？」

「そういうものなんです。さ、カルナージまでお願いしますよ」

転送ポートにつき、準備を促す。

俺は違ったけど、ユーノさんは奥手だ。こうやって後押ししてやらないと先に進まない。

加えてなのはさんも自分からは決して行こうとはしない。普通こういうカップルは成立しないのが常識なのだが、なのはさんとユーノさんは例外だ。

見ているこちらとしてはやきもきさせられるので、非常にストレスが溜まる。

早くくつつけばいいのに…… ヴィヴィオならユーノさんとも仲がいいからすぐに馴染むだろう。

「……まあ、気が向いたら……かな。なのはを傷つけたくはないしね」

「過保護なこと……」

「さ、準備完了。魔方阵の上に乗って」

転送ポートに魔方阵を展開し、いつでもいける状態になる。

サリエルはその上に乗って、手を挙げて礼を言う。

ユーノは礼に対して微笑みで返し、転送魔法を発動する。

激しい光と共に自分の体が伸びるかのような感覚に陥る。

しばらくしてそれが収まると、目の前に緑が広がった。

どうやら転送成功らしい。遠くを見ればロツジ風の建物が目に入る。

「……まゝたパワーアップしたな」

荷物を肩に背負って、歩き出す。

教導の疲れはない。睡眠時間もそれなりに取れている。コンディションとしては悪くないだろう。

これなら……今日の訓練で全開でいける。

「あ、兄さん!!」

「お兄ちゃん!! 久しぶりです!!」

「サリエル、久しぶりい」

「エリオ、キャロ、ルーテシア。久しぶりだな」

ロツジに近づくと、なにやら用意をしていたエリオ、キャロ、ルーテシアが出迎えてくれた。

中から出てきたメガーヌさんにも挨拶して、とりあえず荷物を置く。

「早かったですね。フェイトさん達と一緒に来ると思っていました」

「本局から直行でな……キャロ、身長伸びたか？」

「分かります!？ これでも1.5?伸びたんですよ!! それなのにルーちゃんが……」

「1.5?なんて伸びた内に入らないわよ。サリエル、また遅くなったわね」

「そりゃ、鍛えていますから……で、なんの用意していたんだ？」

「今から薪を取りに行くんですよ。兄さんもどうですか？」

「用意してくるから待っている」

一旦中に入って、制服の上着だけを脱ぎ袖をまくる。

せめて私服が用意できればよかったのだが……あいにく昨日は宿舎に泊まりだ。そんな用意はとつくの前に無くなっている。

脱いだ上着の胸ポケットから結び紐と電子タバコを取り出し、髪をまとめながらタバコを口にくわえる。

これで準備完了。

「よし、行こうか？」

「兄さん……タバコは止めませんか？」

「安心しろ。これは電子タバコだ。体に害のあるニコチン、タール

は一切入っていない」

「……タバコ吸っていても格好良くありませんよ?」

「キヤロ……そこを突っ込んでくれるな。行くぞ」

わかってんだよ……タバコ吸っているからってカッコイイなんて事はないなんて……

ただどこでもしねえと、貫禄がでねえんだよ!?

俺の苦勞も少しは分かってくれよ……

一人心中で落胆しながら、スイッチを入れて吸う。

吐き出された水蒸気が口の周りに広がり、辺りは柑橘系のさわやかな匂いで充満する。

「いい匂いですね」

「だろ? これも案外捨てたもんじゃない」

「でも……どうして吸っているんですか?」

「かつこつけが一番の理由だけど……自分のスイッチだな。今の自分と心の奥に潜んでいる狂気の自分との……」

「えっ?」

「犯罪捜査とかしていると……どうしても冷酷にならないといけない。優しくすれば犯人はつけあがってくる。そうなれば、やられるのは自分だ。だから、冷酷に……残酷にならないといけない」

フェイトやはやてさんから来る捜査協力の多くは、密輸、違法取引、テロ組織の摘発などだ。

当然、その性質上荒くれ者も多いので取り押さえなければいけない状況もままある。

その中で自分の心に暗く、汚れた感情が流れてくる。それが溜まると今度は自分がそちらの立場になっている。

フェイトなどは使命感や正義感と言った天然の濾過装置を備えているが、少年時代に重い事件に巻き込まれたサリエルは今もそう言っ

た感情が火種としてくすぶっているのいつ燃えるかが分からない。ふとした拍子に修羅道に陥る可能性を秘めている。

そこで考案したのが、もう一つの自分を作り上げ、必要な時にその自分呼び出すという物だ。これならばある程度はマシになるらしいし、時間が経てばネガティブな感情も薄れてくる。

シヤマル先生と一緒に構築し、ミントフレーザーの電子タバコを吸うことでもう一人の冷酷で氷のような自分呼び出せるようになった。

サリエルは捜査協力の他に昔の話をするときや、過去の自分を振り返りながら諭すときはいつもこうしてもう一人の自分呼び出す。エリオ達も漠然ながら理解したのか、それ以上タバコの追求はしてこなかった。

「悪いな……せつかくの旅行なのにこんな重い話しちまって……」

「いいですよ。この際、全部吐き出しちゃってください」

「私達は仲間なんです。お兄ちゃんの感情を受け止めるくらい何ともないですから」

「……お前ら、本当にいい弟と妹だな」

二人の優しさと器のでかさに感謝する他無かった。

こんなにも傷つき、小さな俺を包み込んでくれる。

それがどんなに暖かいことか……

「あつ、ありました。ここにある薪を少し持って行けばいいですね」

「でも……私とエリオ君じゃ、そんなに持てないよ？ お兄ちゃんなら結構持てそうだけど……」

「お前らの分しか薪がねえよ。だけど……」

薪小屋にはもう少しの薪しか残っていなかった。多分後でガリユーとかが割ると思うけど……

よし、トレーニングがてら薪を割ろう。
来ていたロングTシャツを脱いで、切り株に丸太をセットする。

「お兄ちゃん、今から割るんですか？」

「ああ。見とけよ……」

手に持った斧を上段に構えて……勢いよく垂直に振り下ろす。
バカンツと音と共に、丸太が綺麗に割れる。
それを二回繰り返し返せば、薪のできあがりだ。

「どうだ？」

「すごいですね……僕にもやらせてください」

「薪割りは原始的ながらも効果的なトレーニングだ。背中全体の筋肉が鍛えられるからな」

エリオに斧を渡してやらせてみる。

しかし、エリオが振り下ろした斧はまともに薪に刺さらず、側面で丸太を打ってしまった。

手が痺れたのか、斧から手を離してブラブラさせる。

「ハハハッ……最初はそんなもんだ。慣れるまでやり続けな」

「イテテッ……笑い事じゃないですよ」

「もう降参か？」

「こういうのは兄さんに任せます」

「おう、任された」

再度斧を持って、振り下ろしていく。

その手際いい割り方であつという間に薪の山ができあがった。
必要な分だけ分けて、残りは薪小屋に規則正しく積み上げた。割っていたサリエルの体からは湯気が出ている。

「よし、これだけあれば十分だろ。戻ろうか？」

「まだ皆さん来ていないのに、そんなに体力使って大丈夫ですか？
お兄ちゃん」

「アップと思えばどうってことはない。いいトレーニングにもなったしな」

「まったく……変わりませんね」

薪を持ってコテージに戻ると、すでにみんなが到着していてルーテシアとメガーヌさんに挨拶していた。

おやおや……アインハルトに加えて新顔がいるじゃないか？
ヴィヴィオの友達か。結構多いんだな。

「エリオ、キャロ」 それにお兄ちゃんも」

「わーおー！エリオ、また背伸びてる！！」

「そ、そうですか？」

「私もちよこつと伸びましたよ！？」

みんながエリオ達を囲み、久しぶりの再会に喜ぶ。

そんな中、置いてかれ気味のアインハルト・ストラトスとユウにフエイトが二人を紹介する。

「アインハルト、ユウ君。紹介するね」

「あつ、はい」

「二人とも私の家族で……」

「エリオ・モンディアルです」

「キャロ・ル・ルシエと飛竜のフリードです」

「アインハルト・ストラトスです……二人はサリエルさんの子供となるのですか？」

「……ハアッ！？」

なんというボケをかましてくるんだ!?

しかも、ごく普通の表情で……まさか、アインハルトって天然じゃ

……

「違う違う。フェイトがこの二人の家族で、俺は二人の兄貴分だ。それに俺達に子供はまだいない」

「そうですか……」

「それで、隣にいる君は？」

「ヴィヴィオの友達の睦月ユウです。サリエルさんに会えて、光栄です」

「またこの手の……ヴィヴィオがいつも世話になっている」

握手をしあつて、ユウとの顔合わせを終える。

手を握つて分かったが、この子も格闘技をやっているみたいだ。それも結構強い。明日の模擬戦で実力を計つてやるとするか。

その時、ガサツと茂みから音がした。アインハルトはそれに反応してすぐさま構える。

出てきたのは黒の甲殻で覆われた人型の虫だ。その姿のせいか、アインハルトはさらに警戒を強める。

「大丈夫だ、アインハルト。アレは敵でも何でもねえ」

「そうよ。私の召喚獣で大事な家族。ガリユーって言うの」

「し、失礼しました」

「私も最初はビックリしました」

スツと礼をして、コテージの中に入っていくガリユー。

背中には自分で獲ったであろう獲物が入った籠が背負われている。アレが昼食に出てくるのか……よだれが出そうだ。

「さて、お昼前に大人のみんなはトレーニングでしょ？ 子供達はどこに遊びに行く？」

「やっぱりまずは川遊びかなと……お嬢も来るだろ？」

「うん！！」

「アインハルトとユウもこっち来いな」

「はっ、はい」

「分かりました」

「じゃ、着替えてアスレチック前に集合にしよう！！」

「……………はいっ！」「……………」

「こつちも水着に着替えてロッジ裏に集合！！」

「……………はい！！」「……………」

ここで各々着替えるために部屋に移動する。

サリエルはエリオ、キャロ、フェイトと一緒に部屋になった。

家族で押し込められたか……ま、こつちの方が気を遣わなくていいけどな。

「始まったね、サリエル♪ 今年もたくさん思い出ができるといいね」

「ああ、久しぶりに本気も出せるし……いい旅行になりそうだ」

「に、兄さん……手加減はしてくださいね？」

「エリオ……すまん、手加減できないかも知れない」

「そんなあ！？」

エリオの悲痛な叫びに笑い声が部屋に木霊する。

実際こしばらく教導ばかりで本気を出した記憶がない。捜査協力も無かったわけだから、ここ数ヶ月アサルトフォームを展開した記憶もない。

だから……今回は思いっきりやらせてもらう。

サリエルは知らず知らず好戦的な笑みを浮かべる。

そんなことを思いながら、春の合宿旅行が幕を開けたのであった。

第六教導 出発……合宿旅行！！（後書き）

今回から出てきた睦月ユウ君は紅先生からアイディアを頂きました。
この場を借りてお礼を言いたいと思います。

さて……この後はどうやって展開させていこう？
水浴びして……訓練して……その後は？

……どうしよう、何も思い浮かばない！？

ま、何とか頑張っていきます。
それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1395w/>

魔法少女リリカルなのはVivid 蒼の重騎士の日常

2011年10月9日20時47分発行